

第 1 部 《沿線美術の百年》 出品作家の略歴

第 2 部《沿線美術のいま》の作家は 11 頁以下に掲載。

① 配列は、50 音順とした。

④ 年次表記は、生没年に限り西暦と和年号を併記したほかはすべて西暦で表記した。

朝井 清

あさい きよし

1901(明治 34)年1月6日、呉市に生まれる。清は本名。晩年に「清愚」の号を用いたことがある。14 年 13 歳にして呉海軍工廠に入廠。同廠に勤務のかたわら、油絵を描く(のち版画が主体となる)。第 10 回広島県美術展覧会に油絵「大阪郊外」を出品、以後同展に毎年のように出品。26 年ごろから独学で版画を志し、26 年の創作版画協会展に出品、初入選。31 年第 1 回日本版画協会展に「ほおづき」「ポンプを押す男」を出品、受賞。32 年広島洋画協会の創立に参加。33 年第 1 回東光会展に「石を運ぶ人」「修理舟」を出品、以後同展が主要な発表の場の一つとなる。同年第 1 回広島洋画協会展に同人として出品。同年広島東光会出品者で構成する朝光会に会員として出品。35 年広島県美術協会のあり方を憂える有志 15 名に加わり建議書を作成、発表。制度改革を求める。36 年工廠から沖繩師範学校へ版画講師として派遣される。39 年第 8 回新興美術協会(春陽会の姉妹団体。田中善之助、若山為三、國盛義篤により、昭和 7 年大阪に設立)で特賞。40 年第 9 回展で二千六百年賞、同協会会員。45 年終戦とともに海軍工廠勤務を解かれる。46 年永瀬義郎、谷本剛平らとともに芸南文化同人会を結成、呉支部長となる。同年の同会美術部第 1 回展に出品。同年 11 月、呉美術協会が結成され副会長となる。47 年第 1 回瀬戸内海美術展で広島県知事賞。50 年第 2 回広島県美展洋画部門の審査員となる(以後、第 3 回展、18 回展の 2 回務める)。51 年東光会展に出品の「軍鶏」で奨励賞。同年第 1 回県美協展で谷本賞。同年の第 7 回日展から日展に出品しはじめ、以後連続出品。52 年東光会会友に推挙。53 年初めての版画個展を東京・サエグサ画廊で開く。この年東光会会員に推挙。このころ中沢弘光に師事。58 年呉市芸術文化功労賞。60 年日本版画協会が分裂、棟方志功、永瀬義郎らとともに日版会創立委員となり、第 1 回日版会展に出品。東光会会員。日版会会員。広島県美展依頼出品者(無鑑査)。住居は、東京では新宿区市ヶ谷富久町、晩年は呉市上畑町に住んだ。1968(昭和 43)年 7 月 11 日、岡山県津山市で死去。67 歳。

69 年中国新聞社の主催により広島県立美術館で《朝井清遺作展》が開催され、遺作約 180 点を展示。72 年《朝井清版画集》(同刊行会編集・発行)刊行。74 年三越広島店で《朝井清版画追悼展》開催。

生田 正雄

いくた まさお

1907(明治 40)年 5 月 15 日、呉市に生まれる。本名は正男。24 年日本水彩画展に初入選。このころから広島県美術展覧会、呉歩会展、呉蒼原会展など、各種展覧会に出品し始める。35 年国画会展、二科展(37 年)もに入選。戦後は、46 年呉美術協会が設立され理事。48 年呉市立警固屋中学校美術科の教員となり、教職のかたわら創作活動。51 年第 10 回水彩連盟展でスター賞。54 年水彩連盟準会員に推挙。56 年水彩連盟会員に推挙。62 年藤川九郎、田辺伝、清田内匠との水彩四人展(広島八丁堀・福屋)。66 年呉市立両城中学校を最後に教職を退く。77 年第 3 回日仏現代展でロオイユ賞(第 3 席)を受賞。78 年同展第 4 回展でロオイユ賞。82 年呉市芸術文化功労賞。呉市立美術館運営審議会委員(87~99 年)、呉美術協会理事、呉市立美術館入門教室の講師などを務めた。呉市宮原七丁

目に住んだ。1999(平成 11)年 3 月 1 日死去。91 歳。

池田 栄廣

いけだ えいこう

1901(明治 34)年 11 月 26 日、賀茂郡広村(現在の呉市広)に生まれる。本名は栄(さかえ)。はじめ堂本印象に、のち安田毅彦に師事。27 年第 8 回帝展出品の「犬」で初入選。以後、30 年第 11 回帝展「初夏の園」、31 年第 12 回帝展「緑陰」、33 年第 14 回帝展「獵」、36 年改組第 1 回帝展「ペルシャ猫」、同年昭和十一年文展鑑査展「薫園」と、計 6 回の入選を重ねた。戦後の日展にも出品、46 年第 1 回展「日吉の紅葉」(六曲一隻)、同年第 2 回展「寒菊」(特選 四曲一隻)、47 年第 3 回展「朝陽」、48 年第 4 回展「整經」と出品を重ねた。一方、再興院展では 42 年第 29 回展出品の「朝」で初入選を果たしたあと、ほぼ毎回出品。51 年第 36 回展では奨励賞、54 年第 39 回展では奨励賞・白寿賞を受賞した。なお、48 年以降は日展には出品せず、日本美術院にのみ属した。また、戦前は出身地・広島との交流も深く、29 年昭和展(広島商品陳列所)、30 年第 5 回広島美術院展、31 年第 6 回展(いずれも広島商品陳列所)のほか、広島県美術協会展覧会や広島県美術展覧会に出品していたことが知られる。さらに 38 年 12 月には三好光志(理事)や宇根元警、岡部繁夫とともに広島芸術協会の結成にも名を連ねている。犬などの動物表現を得意とした。京都市左京区浄土寺南田町に住んだ。1992(平成 4)年 2 月 25 日死去。90 歳。

池田 快造

いけだ かいぞう

1911(明治 44)年 4 月、三原市西町に生まれる。23 年県立府中中学校に入学、在学中、東京美術学校出身の美術教師・藤原覚一の指導を受ける。28 年同校卒業。29 年大阪の赤松絵画研究所に入る。30 年東京の川端画学校で学ぶ。31 年東京美術学校油画科に入学、藤島武二教室に学び、39 年同校卒。この間、第一美術協会展、童林社展、光風会展などに出品。38 年には第 25 回光風会展出品の「埴輪」で F 氏賞、翌 39 年の第 26 回光風会展「昇天」で光風賞を受賞し会友に推挙。40 年第 27 回光風会展では「運河」で光風特賞を受賞するなど、若くして将来を囑望された。官展では、39 年の第 3 回新文展「セロをならす」で初入選を果たした後、40 年紀元二千六百年奉祝展「天使」、41 年第 4 回新文展「笛」と、3 度の入選を果たしたが、43 年ごろから数年来患っていた結核が悪化。1944(昭和 19)年 11 月 7 日、三原市の自宅で死去。33 歳。

65 年三原市で光風会広島支部主催による遺作展を開催、《池田快造遺作画集》が出版される。72 年 3 月、広島県立美術館主催《第 2 回郷土物故作家展》で遺作約 40 点が展示される。93 年《郷土の天才画家・池田快造遺作展》(4.15-25 三原リージョン・プラザ)。94 年三原信用金庫創立 50 周年を記念して《池田快造画集》が刊行される。

今井 政之

いまい まさゆき

1930(昭和 5)年 12 月 25 日、大阪市東区に生まれる。43 年 13 歳のとき父の故郷・竹原市に移り、同所で終戦を迎える。47 年備前市伊部に赴き陶技を磨く。49 年岡山県工業試験場窯業分室に勤務し袖

菓などの研究に打ち込む。このころ洋画家・高屋重夫にデッサンの指導を受ける。52 年京都五条坂の勝尾青龍堂門に入る。53 年京都青陶会の結成に当たり創立同人に加わり、同会主宰の楠部彌次に師事（69 年解散）。同年第 9 回日展に初入選。59 年第 2 回新日展に出品の「焼盤」で特選（北斗賞）。同年東山区五条本町二丁目浄雲寺境内のアトリエに移り独立。61 年現代工芸美術家協会創立会員となる。63 年第 6 回新日展に出品の「泥彩壺」で 2 度目の特選（北斗賞）。同年第 2 回日本現代工芸美術展で会員賞。64 年日本陶磁協会賞。同年第 3 回日本現代工芸美術展審査員。同年京都市展審査員。65 年第 8 回新日展審査員。66 年イスラエルでの国際シンポジウムに日本代表として参加。帰路、欧州各国を巡遊研修。同年日展会員となる。この年アトリエを山科区清水焼団地に新築、移転。67 年現代工芸美術家協会評議員、京都府美術工芸作家協会理事となる。同年大阪大丸美術画廊で個展。68 年京都国立近代美術館主宰《現代陶芸の新世代》展に招待出品。70 年東京日本橋三越画廊で個展。74 年仏パロリス市主催国際陶芸展で名誉最高大賞。78 年竹原市に竹原豊山窯を築く。79 年日本新工芸家連盟に参加、日本新工芸展審査員。85 年米マサチューセッツ州セイラムピーボディ博物館及びカリフォルニア州モンタルボ博物館で《今井政之陶芸展》開催。88 年竹原市に今井政之展示館竣工。90 年東京・京都・大阪高島屋で毎日新聞主催《土の華—今井政之展》開催。以後、たびたび大規模な個展を開く。91 年第 1 回日工会展で総理大臣賞。同年広島文化賞。93 年京都府文化功労賞。94 年京都市文化功労賞。同年国立国際美術館で今井政之近作展。95 年毎日芸術賞。98 年日本芸術院賞。03 年日本芸術院会員となる。現在、日本芸術院会員、日展常務理事、京都府美術工芸作家協会会員など。京都市山科区在住。

上田 直次

うえた なおじ

1880(明治 13)年 2 月 23 日、賀茂郡川尻村(現在の呉市川尻町)に生まれる。本名の名乗りは「なおつぐ」。帝展などの官展出品目録には「なおじ」のふりがなが付されている。太平洋美術学校に学び、山崎朝雲、朝倉文夫に師事。1911 年第 4 回文展に「労働者の妻」で初入選。以後、12 年文展第 6 回、16 年文展第 10 回～第 12 回、19 年帝展第 1 回～第 3 回、24 年第 5 回、26 年第 7 回、27 年第 8 回、29 年第 10 回～34 年第 15 回、39 年新文展第 3 回、40 年紀元二千五百年奉祝展、41 年新文展第 4 回、43 年第 6 回、44 年戦時特別展に出品。この間、30 年の第 5 回帝展に出品の「山羊の親子」で特選。また、16 年広島県美術展覧会の第 1 回展(5.15-30 広島縣物産陳列館)から出品、県内美術界の発展にも寄与した。山羊の親子など、木彫によりヒューマニズムあふれる動物表現に秀でたが、45 年郷里の賀茂郡川尻町(現呉市川尻町)に帰り、仏像の制作に励むなどした。また、49 年創設の広島県美展第 1 回展では審査員を務めた。1953(昭和 28)年 2 月 21 日死去。73 歳。

宇根元 警

うねもと けい

1904(明治 37)年 8 月 2 日、安藝郡吉浦村(現呉市吉浦町)に生まれる。24 年廣島縣廣島師範学校卒(水彩画家・名柄正之と同期)。安佐郡狩留賀に赴任。25 年呉市本通小学校に転任。教員のかたわら創作活動に入る。イーゼル会主催美術展覧会、広島県美術展覧会などに出品。30 年第 5 回 1930 年協会展に「鳥」を出品。31 年独立展第 1 回展に出品、以後、同展には戦前・戦後を通じ毎回出品、主要な作品発表の舞台とした。32 年上京して清水登之に師事。上京後も教職のかたわら制作。40 年独立展第 10 回展に出品の「葡萄」(現在呉市立美術館所蔵)で独立賞。42 年独立美術協会会友に推挙。44 年教員の職を辞し帰郷。戦後しばらくは賀茂郡志和堀村新

市(現東広島市志和堀)に住んだ。46 年独立美術協会準会員に推挙。48 年独立美術協会会員に推挙。49 年独立展第 17 回展審査員。第 1 回広島県美展審査員(50 年第 2 回展～53 年第 5 回展、55 年第 7 回展～59 年第 11 回展、65 年第 17 回展、69 年第 21 回展の 12 回にわたり審査員を務める)。63 年井原思斎との二人展(広島・福屋)。64 年広島文化女子短大の開学にあたり、玄関の大作壁画を制作。65 年返還前の沖縄へスケッチ旅行。67 年東京銀座・壱番館画廊で個展。在京中は大森区久ヶ原、帰郷後の一時期、賀茂郡志和堀村新市、のち呉市吉浦東本町に住んだ。1970(昭和 45)年 9 月 25 日死去。66 歳。

71 年第 38 回独立展広島展(4.8-13 広島県立美術館)に際して宇根元警遺作展が併設され、油彩画の遺作 72 点に模写 5 点水彩画 5 点が展示される。99 年 4 月 25 日早朝、呉市吉浦町の旧宅から出火、遺作 170 点余を焼失。

太田 忠

おおた ちゅう

1908(明治 41)年 3 月 2 日、広島市西蟹屋町(現在同市南区)に生まれる。23 年鉄道省広島機関庫の庫内手として就職。機関手を務めるかたわら創作活動。27 年ごろから広島県美術展覧会に出品し始める。37 年夏期講習会のため広島に来ていた鉄道好きの中西利雄から小磯良平と猪熊弦一郎の紹介を受ける。38 年第 24 回広島県美術展覧会で広島県美術協会賞。同年第 3 回新制作派協会に出品の「汽車の見える風景」「鉄橋を走る汽車」が初入選。39 年第 26 回日本水彩画会展入選。41 年同展第 6 回展に出品の「雪景」ほか 2 点で岡田賞。「雪景」は三井コレクションの買い上げとなる。42 年広島・中国新聞社講堂で太田忠個人展開催。43 年新制作派協会協友に推挙される。46 年呉市・蜂の巣百貨店での芸南文化同人会美術部秋季美術展に永瀬義郎、南薫造らとともに出品。47 年第 1 回美術団体連合展に出品。以後、同展第 3～5 回展にも出品。このうち、50 年第 4 回展出品の「ヒュッテ」で毎日新聞社賞。48 年第 12 回新制作派協会展で新作家賞。同年第 1 回新制作派協会選抜 7 人展に出品。同展出品の「雪景」(30 号)がニューヨーク市の美術館に収蔵される。51 年第 15 回新制作派協会展(「新制作派協会」から名称変更)で 15 年賞。52 年新制作派協会会員に推挙。同展には終生出品し続けた。53 年以降、毎日新聞社主催・国際美術展第 2～4 回展、同社主催・現代日本美術展第 1～4 回展に出品。53 年国鉄功績章受章、63 年国鉄退職。この年フランスに渡り翌 64 年帰国。68 年新設の広島県立美術館協議会委員に就任。この年再渡欧、翌 69 年帰国後、名古屋・日動画廊、広島・スズカワ画廊、広島・福屋で個展。三次市三次町に住んだ。1971(昭和 46)年 4 月 29 日急性心不全のため死去。63 歳。

71 年第 14 回県北公募展(三次公民館)に太田忠遺作展を併設開催。同年第 35 回新制作油絵展(広島県立美術館)に太田忠遺作展を併設開催。74 年《太田忠画集》(凸版印刷)出版。79 年広島県立美術館主催《太田忠遺作展》開催、遺作 130 点余を展示。06 年三次市の奥田元宋・小由女美術館主催《県北ゆかりの作家たち I・太田忠展》開催、遺作 60 点余を展示。

岡崎 勇次

おかざき ゆうじ

1924(大正 13)年 9 月 25 日、因島市土生町に生まれる。37 年広島県立忠海中学校(現在の県立忠海高校)に入学。当時、同校に勤務していた戸塚孝三郎(当時光風会友、のち会員。)の薫陶を受ける。同級生に秦森康屯。42 年広島県立忠海中学校卒。44 年戦争のため大阪青年師範学校を繰り上げ卒業。46 年因島で教員を務めるかたわら創作活動。48 年ころ、疎開中の野間仁根(愛媛県越智郡泊村)、緒方亮平(沼隈郡鞆町)の指導を受ける。49 年第 35 回光風

会展出品の「瀬戸の早春」で初入選。51年田村一男に師事。同年第3回広島県美展で三原市長賞。第7回日展出品の「波止場附近」で初入選。55年第41回光風会展出品の「帰港」でA氏賞。56年第42回同展出品の「赤い船」で光風特賞。57年第9回広島県美展審査員を初めて務める(以後第12回から38回までの間に都合11回務める)。59年第2回新日展出品の「白い船」で特選。60年光風会会員に推挙。同年10月から翌61年10月までの1年間フランスに遊学。62年広島八丁堀・福屋で《岡崎勇次滞欧作品展》を開催。以後、同百貨店で2年おきに個展開催。63年広島・安田女子大学講師(65年助教授。76年教授を退任)。64年因島から広島に移る。71年光風会評議員。74年東京・文藝春秋画廊で大作など25点による個展開催。75年スペインに取材旅行。76年広島修道大学教授に就任。この年から毎年冬に北海道に取材旅行。80年ギリシアに取材旅行。82年メキシコに取材旅行。83年因島市主催《岡崎勇次展》(因島市民会館)開催。85年広島八丁堀・福屋で《黒から白へ生命を見つめる…岡崎勇次展》開催。同時に画集《岡崎勇次》を発刊。同年イタリア・ドイツの中世を訪ねて取材旅行。広島市東区牛田新町に住んだ。広島県立美術館協議会委員、広島県美展運営審議委員、広島県立美術館整備基本計画検討委員会委員、ひろしま美術館企画運営委員などを務めた。著書に《色彩の造形美学》(79年丸善)がある。広島市東区牛田新町に住んだ。1991(平成3)年5月30日死去。66歳。

没後、遺作の大部分は呉市下蒲刈町の蘭島閣美術館に収蔵された。97年画文集《ひとり旅》刊行。00年蘭島閣美術館主催《岡崎勇次—その生涯をたどる—》展。06年呉市立美術館主催《没後15年追想・岡崎勇次展》(4.27-6.4)。

岡部 繁夫

おかべ しげお

1912(明治45)年2月25日、呉市広長浜に生まれる。30年上京。兄とともに目黒区で鉄工所を経営するかたわら独学で油絵を学ぶ。まもなく独立美術協会の田中佐一郎、鈴木保徳に師事。37年第23回広島県美術展覧会に出品に「卓上静物」「花束のある静物」が入選。38年第8回独立展に出品の「風景」で初入選。同年、広島芸術協会(会長・田中月観)の結成に参加。39年第25回広島県美術展覧会に推薦出品。47年東京銀座・松坂屋で初めての個展。48年独立美術協会会友に推挙。50年第18回独立展出品の「春の饗宴」で独立賞。55年独立美術協会準会員に推挙。56年東京銀座・村松画廊で2回目の個展。59年独立美術協会会員に推挙。63年東京・文藝春秋画廊で3回目の個展。64年東京・文藝春秋画廊で4回目の個展。朝日新聞社主催《選抜秀作展》に出品。世界現代美術展に招待出品。個展で発表した「作品 W」が文部省買い上げとなり東京国立近代美術館に収蔵される。65年《第8回国際美術展》に出品の「作品 UZ」で優秀賞。65年東京・文藝春秋画廊で5回目の個展。67年広島八丁堀・福屋で《岡部繁夫個展》開催。「作品 MWB」などの大作展示。この年、出身地呉で初めての個展(11.14-17 呉市立体育館サブコート)。「作品 MWB」など約40点を展示。68年呉市勤労文化会館に大作「流動」を納める(その後、呉市立中央図書館を経て、現在は呉市立美術館に移管、同館が所蔵)。初期の写実的画風から戦後はしだいに抽象傾向を強め、晩年は極端に絵の具を盛り上げる大作に果敢に挑み独特の画風を確立した。東京都目黒区に住んだ。1969(昭和44)年3月10日死去。57歳。

73年広島県立美術館主催《第3回郷土物故作家展》(3.3-3.18)で遺作約50点が展示される。86年呉市立美術館昭和61年度常設展示特別陳列として遺作16点と周辺作品12点を展示(7.31-9.21)。

小野川 幹雄

おのがわ みきお

1929(昭和4)年3月29日、呉市今西通四丁目に生まれる。東京農業大学卒。春日部たすくに師事。50年第9回水彩連盟展に出品の「紅梅」で初入選。51年呉市役所に吏員として入り、公務のかたわら創作活動。同年第6回呉市美術公募展で呉市長賞。52年同展第8回展で呉市教育委員会賞。55年第7回広島県美展に出品の「木立」で呉市長賞。56年第15回水彩連盟展でみずゑ賞。57年同連盟会友に推挙。58年第17回水彩連盟展で三宅賞。59年呉公民館で初めての個展を開く。「ポプラ並木」など23点を展示。以後、毎年のように開催し14回に及ぶ。60年水彩連盟準会員に推挙。61年水彩連盟会員に推挙。63年天満屋広島店で坪谷義人との二人展開催。同年日華水彩画交流展に出品。83年天満屋広島店で個展「山を描く」開催。85年同店で個展「海を描く」開催。89年呉市立美術館での《くれみずえ9人のあゆみ展》に出品。90年呉そごうで個展「花を描く」開催(93年、96年、99年にも開催)。92年呉市芸術文化功労賞。長年にわたり呉美術協会会員として役員を務めた。呉市広弁天橋町に住んだ。2001(平成13)年11月4日死去。72歳。

梶田 英一

かじた えいいち

1917(大正6)年3月22日、呉市に生まれる。41年東京美術学校卒業。藤島武二、寺内萬治郎に師事。同年の第28回光風会展に「黄色の服」を、第4回新文展に「K嬢の像」をそれぞれ出品、いずれも初入選。42年応召、従軍(46年まで)。48年東京美術学校広島県出身者で構成するウエノグループ第3回制作展(3.26-30 広島八丁堀・朝日ホール)に出品。同年第2回美術団体連合展に出品、入選。52年第38回光風会展でS賞。57年呉・広島証券2階で個展。以後、呉での個展開催は30回に及ぶ。58年光風会会員に推挙される。59年第2回新日展出品の「午後の部屋」で特選。68年東京銀座・みゆき画廊で個展。以後、東京都内各所で毎年のように個展開催。同年、呉市勤労者文化会館に「初秋」を納める。作品は広島県立美術館、呉市立美術館、呉市役所、呉商工会議所、広島県立呉宮原高等学校などに収蔵。日展会友、光風会会員。日本山岳画協会会員。東京都世田谷区上祖師谷に住んだ。1993(平成5)年8月4日死去。76歳。

片岡 京二

かたおか きょうじ

1899(明治32)年2月18日、安藝郡莊山田村(現、呉市三条三丁目)に生まれる。09年10歳のとき田舎まわりの絵師・波多野驍鳳に弟子入り。11年驍鳳に従い京都に出る。12年京都市立美術工芸学校予科に入学。13年広島県吉舎町の日彰館中学へ転校。16年京都市立美術工芸学校に再入学。20年同校を中退。上京、下谷に住む。この年、日本橋・鐘美閣画廊で初めての個展。23年荏原郡松沢村(現世田谷区)に転居。関東大震災に遭い、一時呉に帰省。25年第6回中央美術展に「海産」を出品。28年第9回帝展に「秋華」を出品、初入選。32年第13回帝展に「閑棲」を出品、入選。その後は官展に出品せず。28年上中里(現北区)建部光鷹子爵の仮住居跡に坂本雅城、京屋金介らと寄寓。同年第9回帝展に「秋華」を出品、初入選。32年第13回帝展に「閑棲」を出品、入選するも、以後官展から離れる。33年中国新聞呉支局中国会館で《片岡京二郷土後援画会》。38年郷里の父死去。39年郷里から母を呼び寄せ松原(世田谷)に転居。45年このころから各出版社の児童向け雑誌などに挿絵を描いて糊口をしのぐ。60年銀座・養清堂で個展。63年「異端の会」を結成するも翌年解散。65年《片岡京二作品頒布会》。87年《片岡京二日本画展》(まちだ東急百貨店)。88年玉川学園教育博物館(のち玉川大学教育博物館に改称)に旧作など7点を寄贈。終

戦直前から世田谷区赤堤に住んだが、最晩年は神奈川県三浦市の老人福祉施設で過ごした。1993(平成5)年 10 月 26 日死去。94 歳。

00 年《早菘の画家・片岡京二展》(1.17-2.8 玉川大学教育博物館, 4.21-5.21 呉市立美術館)。

迦洞 無坪

かとう むへい

1891(明治 24)年7月4日、双三郡三次町(現在の三次市三次町)で旅館を営む父加藤淳郎久、母センの間の5人兄弟の長男として生まれる。本名は加藤慶造。1917(大正6)年 25 歳のとき、旅館を廃業した父に従い広島市に出て大手町に住む。翌年、陶芸家を志して京都に出、五条坂の河合栄之助に陶芸を学び、しだいに朝鮮、中国の古陶磁に傾倒するようになった。このころ、在家仏教界の偉才・足利浄円(西本願寺)の知遇を得て、その教えに心酔。以後、親密な関係をもつようになる。大正 10(1921)年頃、満州(現在の中国東北部)に渡って窯業試験場・小森研究所に入り、中国、朝鮮各地の古窯址を回り本格的に古陶磁を研究。同 15(1926)年、満州から帰り京都市東山区熊野日吉町に居を構えて作陶に専念、富本憲吉、河井寛次郎らの陶芸家と交わり、迦洞無坪の号を名乗った。昭和 10(1935)年には足利浄円師が広島県豊田郡東野村生野島(現在の大崎上島町)に計画した念仏道場・生野島同朋精舎の計画に共鳴・賛同し、家族をあげて生野島に移住、みづから設計した「阿伊庵(あいあん)」を建て、傍らに陶窯を築いて生野(いくの)窯を創始した。生野島に移って以後は「無坪」を「無坪」と改号。このころ、放浪の俳人・種田山頭火が無坪を訪ねて二度ほど生野島を訪れたことが山頭火の日記に見える。現存、確認される作品はきわめて少ないが、磁器作品には中国陶磁の影響を受けた作例が多く認められる。また最晩年は、聖徳太子像をはじめ、観音像、菩薩像など、素焼きの仏像を数多く制作した。1947(昭和 22)年3月 31 日生野島の阿伊庵で死去。55 歳。

74 年3月広島県立美術館主催「広島県のやきもの」展で遺作 22 点のほか、自筆書簡類数点が展示される。参考文献:末田克美《迦洞無坪の人と作品》(広島県文化財ニュース第 11 号 昭和 36 年 広島県文化財協会)、《復刻・迦洞無坪陶房日記》(昭和 49 年 迦洞無坪顕彰会)。

鎌田 功治

かまだ こうじ

1902(明治 35)年6月 10 日、呉市西二河通に生まれる。30 年國學院大學高等師範部卒。呉市岩方小学校に勤務。34 年第4回独立展に出品の「電車と車庫附近」が初入選。35 年第5回独立展「静物」が入選。同年第4回広島洋画協会展に出品。36 年第6回独立展「新緑と白壁」が入選。37 年呉独立美術研究会第1回新作洋画展(5.28-30 呉銀行)に出品。同年第7回独立展「とうもろこし 花くだ物」が入選。同年応召して北支に赴く。39 年帰還。40 年教職をいったん退き中華民国青島に住む。同年第 10 回独立展「徐州風景」, 41 年第 11 回独立展「土」, 42 年第 12 回独立展に「嶗山残雪」がそれぞれ入選。45 年呉空襲により、それまで制作した作品のほとんどが焼失。46 年大陸より引き揚げ。48 年広小に務め始め、教職のかたわら創作活動。67 年広中央中学校長を最後に教職を退く。この年初めての個展開催。ヨーロッパ旅行。68 年呉相互銀行本店ロビーで鎌田功治油絵展。69 年同銀行で鎌田功治展。70 年呉・銀座デパートで個展。呉市広大新開に住んだ。呉美術協会会員。形象派美術協会会員の鎌田知治(1907-1980)は実弟。1975(昭和 50)年 11 月 28 日死去。73 歳。

77 年《鎌田功治遺作展とそのファミリー》展(7.27-29 呉相互銀行本店サロン)。遺作 38 点を展示。91 年《広島美術の系譜》展

(2.2-3.24 広島市現代美術館)で「新緑と白壁」(第6回独立展)を展示。

鎌田 知治

かまだ ともはる

1907(明治 40)年、呉市に生まれる。30 年第5回 1930 年協会展に出品、入選したのをはじめ、戦前は独立美術協会展、広島県美術展覧会、呉ポペニエ会などに出品した。戦後は 53 年形象派美術協会第1回展で審査員賞。この年から形象派美術協会広島支部事務局長を務める(〜64 年)。54 年形象派美術協会準会員。55 年形象派第3回展で形象派展賞。56 年形象派美術協会会員。58 年形象派展第6回展で M 氏賞。61 年形象派展第9回展で形象派展賞。同年第6回日本国際美術展に出品、入選。62 年《鎌田知治洋画個展》(12.23-25 呉歯科医師会館)。69 年形象派第 17 回展審査員。形象派美術協会会員。公立学校教員で独立美術協会展に出品した鎌田功治は実兄。1980(昭和 55)年死去。

04 年《1940-60 年代・広島洋画の粋》展(10.5-11.28 広島県立美術館)で「あじさいの咲く頃」「不可思議なる頭脳」を展示。

木村 震

きむら れき

1904(明治 37)年6月9日、竹原市竹原町に生まれる。本名は助治郎。23 年上京、開成中学校夜間部に通いながら太平洋絵画研究所に入り絵画の研究。24 年開成中学退学。25 年太平洋絵画研究所をやめ朝倉造研究所に入り彫塑を研究。28 年同研究所を退所、東京美術学校彫刻科塑造部選科に入学。32 年第 13 回帝展出品の「指先」で初入選。33 年東京美術学校卒。同校彫刻科塑造部選科に入る。34 年第 15 回帝展に「思ひ出」入選。36 年昭和 11 年文展に「追憶」入選。37 年第1回新文展に「黎明」入選。40 年紀元二千六百年奉祝展に「晴秋」入選。42 年第5回新文展に「想」入選。45 年戦争激化のため帰郷。46 年第2回日展に「再起」入選。47 年日展委員となる。この年から地元の高校、中学で講師として教鞭を執る。51 年広島県美展依頼出品作家(無鑑査)となる。52 年第4回広島県美展審査員を初めて務める(53 年第5回展, 54 年第6回展, 57 年第9回展, 59 年第11回展, 62 年第14回展, 64 年第16回展, 66 年第18回展, 67 年第19回展, 69 年第21回展, 70 年第22回展の都合 10 回務める)。62 年広島八丁堀・福屋で在広彫刻作家の浜谷広雲、今川良雄、林健、林勝見と《彫塑5人展》。日展委員、広島県美展依頼出品者(無鑑査)、竹原市美術協会副会長、竹原市文化財保護委員などを務めた。竹原市下野町に住んだ。1999(平成 12)年9月 21 日死去。95 歳。

96 年《竹原ゆかりの作家展—木村震・手島守之輔・坊一雄・南薫造—》(9.28-10.20 たけはら美術館)。

小寺 健吉

こでら けんきち

1887(明治 20)年1月8日、岐阜県大垣市に生まれる。1911 年東京美術学校西洋画科卒。12 年第1回光風会展から出品。13 年第7回文展に「秋近く」を出品、初入選。14 年第3回光風会展に「女」ほか 3 点を出品、今村奨励賞。第8回文展出品の「浅草の夏の真昼」を出品、褒状。15 年小寺健吉作品展(銀座美術館)。第9回文展出品の「水のほとり」で褒状。22 年渡欧。パリに拠点を置き、イギリス、スペイン、ベルギー、オランダ、イタリアを巡遊。23 年帰国の途につく。帰路インドに立ち寄る。《小寺健吉滞欧作品展》(日本橋・三越呉服店)。24 年光風会会員に推挙。27 年2回目の渡欧。28 年第9回帝展に出品の「南欧のある日」で特選。29 年帝展推薦となる。33 年光風会評議員。39 年第 26 回光風会展審査員を務める。43 年第 30 回光風会展に「水のほとり」(第9回文展出品)が展示される。47 年

《第1回美術団体連合展》に出品(48年第2回展～51年第5回展出品)。50年第6回日展審査員を務める。54年呉の財界人や医師らでつくるアマチュア・グループ《15人会》の絵画指導にあたる(～66年)。65年《画業50年記念展》(日本橋・三越)。東南アジア旅行。《小寺健吉画業50年記念画集》刊行。66年渡欧。パリに拠点を置き取材。イタリア、スイスにも出かける。76年シンガポール、パリ行き。年末から翌77年にかけて再度訪れる。77年日展事務局から永年表彰。日展参与、光風会理事を務めた。東京都杉並区松庵町に住んだ。1977(昭和52)年9月20日死去。90歳。

清水 南山

しみず なんざん

1875(明治8)年3月20日、豊田郡能地村(現在の三原市幸崎町能地)に生まれる。本名は亀蔵。1896年東京美術学校彫金本科卒。同校研究科に入り加納夏雄、海野勝珉について古作を研究。99年藤田文蔵について塑像を修業。1902年東京美術学校彫金科と塑像研究科を修了。03年東京で彫金を自営し始める。この年父の死により家督を継ぎ一時帰郷するも翌04年上京。太平洋画会夜学部に通い木炭画を修める。09年香川県立工芸学校教諭として高松に赴任。15年病を得て同校を辞し、あえて四国八十八か所を巡礼。同年から約1年半の間、奈良・法隆寺に滞在、古美術の研究に没頭。16年上京。文京区駒込に住み彫金を自営。18年大正天皇ご即位記念「金粧飾太刀」制作中の岡部覚弥が死去、かわってその制作に当たり、翌19年完成。同年母校・東京美術学校教授になる。22年平和記念東京博覧会審査官。25年工芸齊々会の結成に参加。商工展の工芸審査委員会委員。26年練馬区中村町に移転。27年帝国美術院美術展覧会(帝展)委員・審査員となり、以後毎年務める。28年大礼記念章受章。30年勲六等瑞宝章受章。34年帝室技芸員。35年日本彫金会会長。帝国美術院会員。37年第1回新文展審査員。39年幸崎小学校の校章を創案。40年勲四等瑞宝章受章。43年従四位に叙せられる。45年幸崎の生家に帰る。東京美術学校を辞す。47年幸崎中学校の校章を創案。日本画家・平山郁夫の大伯父に当たる(妹マサヨは対岸・瀬戸田の平山家に嫁し、平山郁夫の祖母)。東京時代は練馬区中村町(現在の練馬区中村橋)、帰郷後の晩年は生家のある豊田郡能地村(現在の三原市幸崎町)に住んだ。1948(昭和23)年12月7日、日展審査のためにもどった東京の自宅で死去。73歳。

70年生家跡地に「南山碑」建立。79年東京藝術大学陳列館で《清水亀蔵(南山)彫金作品展》。81年地元有志により「南山先生を語る会」結成、第1回清水南山作品展(82年第2回展)。83年遺族により愛用品、書簡類が「語る会」に寄贈される。84年三原市主催《清水南山・池田快造遺作展》。86年広島県立美術館主催《近代日本工芸の巨匠・紫水と南山展》。91年竹原市忠海町で語る会主催《清水南山展》。94年三原市主催《彫金芸術の巨匠・清水南山展》。03年ふくやま美術館主催《清水南山と平山郁夫—芸術家の系譜—展》。

砂原 久

すなはら ひさし

1912(明治45)年6月3日、竹原市下野町に生まれる。30年広島県立忠海中学校(現県立忠海高等学校)卒。33年広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画手工科卒。北海道旭川師範学校教諭として赴任。43年北海道第三師範学校助教授。50年神戸大学教育学部講師。56年第18回一水会展に「市街図」で初入選。以後、同展に毎年出品。62年第24回一水会展に出品の「回廊」「多宝塔」を出品、安井奨励賞。63年一水会会員に推挙。同年第6回新日展に「回廊」を出品、入選。以下、同題で64年第7回展、65年第8回展、67年第10回展、68年第11回展に出品、入選。71年第23回広島県美展出品の「回廊」で三原市教育委員会賞。同年、広島八丁堀・

福屋で初めての個展《砂原久油絵展》(73年、76年、79年も同所で開催)。73年広島大学教育学部東雲分校教授となる(76年退官)。広島市安佐南区相田に住んだ。広島大学名誉教授。一水会会員。広島県美展無鑑査。広島日展会会員。2000(平成12)年6月29日死去。88歳。

空野 八百蔵

そらの やおぞう

1916(大正5)年8月24日、呉市警固屋町に生まれる。本名は末人(すえと)。出品画では、戦前は「洲絵人」を名乗り、戦後は62年頃まで「末人」。63年頃から「八百蔵」を名乗る。小学校3年より鎌田知治に指導を受ける。34年上阪し大阪独立美術研究所にて学ぶ。37年第7回独立美術協会展に「かぼちゃ島といが茄子」を出品、初入選。独立美術協会会員・田中佐一郎に師事。第1回呉独立美術研究会洋画新作展に荒井不可志、鎌田知治らとともに出品(5.28-30於・呉銀行)。38年上京、日本美術学校に籍をおく。日本エッチング協会会長・西田武雄のもとで半日働きながらエッチングと洋画の勉強に打ち込む。住居を池袋、板橋、船橋と転々と変える。以後40年間の東京に住む。42年戦時中は大東亜戦争美術展、海洋美術展等に参加、出品。43年初めて個展を開く(3.2-21於・呉新聞社)。石原産業客員として食録を受け、シンガポールを本拠地として南方諸地域を旅して2年間取材。52年第20回独立美術協会展に「スクラップ、新しい街」を出品、奨励賞。55年第23回独立美術協会展に「とり」を出品、奨励賞。59年第27回独立美術協会展に「とり」を出品、独立賞。60年第28回独立美術協会展に「とり」を出品、奨励賞。64年独立美術協会展第30回展で会員に推挙される。62年ハワイ・ホノルル曹洞宗本山で個展開催。北米を経てヨーロッパに回り、パリに本拠を置き西欧8か国を巡遊取材。パリに2年間滞在。71年ブラジル・サンパウロ市の日伯文化会館で個展を開催。サンパウロ州政府作品買い上げとなる。ペルー・リマ市の日本人会館で個展を開催。インカ帝国の文化遺跡を巡りパリに向かう。72年パリに本拠を置き、グループ展、アンデパンダン展、ナショナル・ド・パリ展などに出品。76年帰国。アトリエを山県郡加計町(現北広島市)に定める。84年アトリエを広島市西区井口1-10-32に移し、絵画教室を開く。1993(平成5)年5月17日没。76歳。

84年《画業50年・空野八百蔵自選展》(6.20-24 呉市立美術館2階)。94年《空野八百蔵遺作展》(11.23-27 呉市立美術館2階)。07年呉市立美術館平成18年度第IV期コレクション展《色の魔術師・空野八百蔵》(2.9-3.25)。

高中 惣六

たかなか そうろく

1900(明治33)年2月10日、因島市原町に生まれる。17年宮城県立工業学校漆工科卒業。卒業と同時に東京美術学校助教授・石井吉次郎に師事、漆芸全般について学ぶ。23年関東大震災に遭い、帰郷。戦前は地元広島の工芸美術界で活動、広島商品陳列所(広島産業奨励館)での昭和美展、広島県美術協会展覧会、広島県美術展覧会などに出品した。32年には広島県美術協会会員となり、広島県美術展覧会の審査員を務めた。37年中国・四国連合美術展で特賞。戦後は、福山での小林和作を中心とする晩照会展に会員として出品した。63年第10回日本伝統工芸展で初入選。広島県内同展出品者で初入選者となり、日本工芸会に所属した。乾漆技法を得意とし、三原市広友町に住んだ。漆芸家的高中隆二は子息。1974(昭和49)年5月30日死去。74歳。

手島 呉東

てしま ごとう

1862(文久2)年、賀茂郡仁方村(現呉市仁方町)の庄屋・手島浦太郎(号は松波)の次男として生まれる。俗称は謹一郎。幼時から詩画を好み、大阪の南画の大家・森琴石(1843-1921)に師事。はじめ「香石」と号し、のちに「素岳」、晩年に至り「呉東」と号した。各地の景勝を遊歴して画技を磨き、とりわけ山水画を得意とした。《本朝古今書畫名家詳傳》(明治27年刊)、《日本名画家選》(昭和5年刊)、《帝国書畫便覽》(昭和8年刊)に「呉東」の名がみえる。また、1927(昭和2)年4月23日付け芸備日々新聞及び中国新聞が広島葉書倶楽部で個展の開かれたことを報じている。

子弟も多くいたらしく、賀茂郡志和村(現東広島市)の人で、のちの京都に出て亡くなった粟田扇山(=粟田達郎)や安芸郡海田の人・出野巖山(=出野亀登)らが知られる1936(昭和11)年9月28日死去。75歳。

85年手島征三主催・呉阿賀郷土資料研究会後援により《手島呉東遺作展》(9.5-9.8 呉市立美術館)開催。遺作51点と遺品85件を展示。

手島 守之輔

てしま もりのすけ

1914(大正3)年、竹原市東野町に生まれる。34年東京美術学校油画科入学。南薫造教室で学ぶ。37年第2回新制作派協会展(12.8-25 東京府美術館)に「蘇鉄と少女」を出品、入選。38年第3回新制作派協会展(11.24-12.10 東京府美術館)に「奇跡の渴望」を出品、入選。39年東京美術学校卒業。このころ練馬区にアトリエを借りて制作。41年第6回新制作派協会展(9.23-10.4 東京府美術館)に「循環」「断片」「時間」を出品、入選。42年第7回新制作派協会展(9.23-10.4 東京府美術館)に「黎明」を出品、入選。43年《決戦美術展》(9.1-16 東京府美術館)に「断ジテ守ル」を出品。この年戦争激化のため郷里・竹原に疎開。県立忠海中学校の図画講師を務める。新制作派協会協友。45年8月1日臨時招集を受け広島第二部隊に入隊。同年8月6日原子爆弾に遭う。1945(昭和20)年8月16日被曝が原因で死去。31歳。

55年《郷土美術家遺作展》(6.12-7.6 平和記念館3階)に他の作家とともに遺作が展示される。96年《竹原ゆかりの作家展—木村廉・手島守之輔・坊一雄・南薫造—》(9.28-10.20 たけはら美術館)。

戸塚 孝三郎

とづか こうざぶろう

1907(明治40)年1月23日、沼隈郡浦崎村(現在の尾道市浦崎町)に生まれる。25年福山師範学校卒業後、小学校教員。30年広島県立忠海中学校教諭となる。37年第1回新文展に出品の「孔雀」で初入選。38年第25回光風会展に出品の「庭の一隅」で船岡賞。39年同展第26回展に出品の「池辺」でレートン賞、光風会会友に推挙。46年光風会会員に推挙。49年県立沼南高校に勤務(62年3月まで)。50年第2回広島県美展の審査員を務める(以後、51年第3回展~54年第6回展、56年第8回展、58年第10回展、59年第11回展の審査員を務めるなど、亡くなるまで県美展の運営に深く関与した)。59年中国新聞社主催《広島県在任代表美術家展〈1.4-11 広島八丁堀・福屋〉》に招待出品(60~62年まで連続出品)。62年第5回新日展出品の「ぎんけい鳥」で特選。64年中国新聞社主催《第1回中国新聞招待美術展〈1.22-26 広島八丁堀・福屋〉》に招待出品。この年渡欧、8ヶ月にわたって各地を巡遊。65年春帰国。《滯欧作品展》(広島銀行松永支店、広島相互銀行松永支店)開催。尾道市浦崎町に住んだ。光風会会員、光風会広島支部長(戦後の一時期)、広島県美展依頼出品者(無鑑査)。尾道市浦崎町に住んだ。1965(昭和40)年6月14日死去、58歳。

65年《戸塚孝三郎追悼展》(7.?-31 尾道・衆望)。66年《故戸塚孝三郎滯欧作品展》(7.8-12 天満屋福山店)。68年《戸塚孝三郎画伯をしのぶ洋画展》(4.1-10 福山・葵画廊)。同年《戸塚孝三郎追憶展》(5.?-10 福山・葵画廊)。74年《第60回記念光風会展広島展》(6.27-7.2 広島県立美術館)に広島開催15周年を記念して戸塚ら6人の遺作を特別展示。95年《没後30年・戸塚孝三郎展》(11.10-12.17 ぶくやま美術館常設企画展)。

永瀬 義郎

ながせ よしろう

1891(明治24)年1月5日、茨城県西茨城郡北那珂村に生まれる。09年この頃、上京して白馬会原町洋画研究所に通う。11年東京美術学校彫刻科入学するも家事の都合を理由に退学。雑誌《白樺》でムンクの版画を知り、版画家を志す。13年前年創刊の雑誌《聖盃》(この年《假面》と改題。)の同人となり長谷川潔と交替で表紙や挿絵を担当(15年終刊)。14年第1回二科展に版画5点を出品(公募展初の創作版画出品)。16年長谷川潔、広島晃甫と日本版画倶楽部結成、第1回展開催。わが国初の創作版画展となる(18年山本鼎、織田一磨らの日本創作版画協会に合流)。18年第1回国画創作協会展に2点出品。19年第1回日本創作版画協会展に7点出品(31年日本創作版画協会、洋風版画会、無所属作家が集まり日本版画協会結成)。22年版画手引書《版画を作る人へ》刊行。23年第1回春陽会展に出品。27年第8回帝展に版画「髪」を出品、入選(その後官展には、28年第9回帝展、38年第2回新文展に出品。39年第3回展に無鑑査出品するも油彩画を出品したため拒否され、以後官展には出品せず。)。29年第7回春陽会展に「ある日の上山草人」など出品、春陽会賞。同年版画研究のため渡仏。31年春陽会会友。36年パリで知り合ったマダム・テロンドル(日本名サト)と娘シモンヌを伴い帰国。滯欧作品個人展(呉商工会議所)。永瀬義郎滯仏洋画展(広島・銀座画廊)。兵庫県武庫郡御影に住む。38年このころ大阪北浜に転居。妻テロンドル、フランス料理店を開店。39年陸軍嘱託として中国大陸に渡り取材。43年大阪北浜を引き払い妻サトの郷里・広島県賀茂郡安芸津町風早に疎開。46年2月朝井清らとともに芸南文化同人会の結成に参加、3月同会美術部第1回展(竹原高女)に出品。同年8月、芸南文化同人会会誌《芸南文化》夏季創刊号発刊するも2号で終刊となる。同年10月、南薫造らとともに広島の新観光ルートを探る「絵と文」の写生旅行に参加。芸南文化同人会美術部秋季美術展(呉市蜂の巣百貨店)に出品。47年第6回芸南美術展覧会(竹原・照蓮寺)に出品。50年《永瀬義郎近作個展》(広島CIE図書館)。52年上京、渋谷区神山に住む。第8回日展に出品。(以後、第9、10、11、12、13回展に出品)。53年世田谷に転居。57年第43回光風会展に会員として出品。同年東京国際版画ビエンナーレに国内委員として出品。この年北区に転居。60年第1回日版会展に出品。61年台湾で個展開催。64年練馬区石神井に転居。69年永瀬義郎自選版画展(水戸市)。70年画業60年記念永瀬義郎自選版画展(東京)。この年各所属団体を離れ無所属となる。73年日本近代版画60年の歩み・永瀬義郎自選版画展(水戸市)。この年、新しい版画技法「Nagase Prints '73」を創出。73年画業60年記念《永瀬義郎自選版画集》出版。75年日本版画史を生きる—永瀬義郎のすべて展(東京)開催、300余点を展示。77年自伝《放浪貴族》(国際PHP研究所)出版。1978(昭和53)年1月23日済生会中央病院(東京)で死去。87歳。

78年《永瀬義郎版画集「NAGASE—人と芸術—」》(ネオアカシア)刊行。80年石神井の自宅を開放「永瀬義郎の館」を開館(88年閉館)。81年《永瀬義郎版画展》(8.1~31 東広島市立美術館)。87年没後10年《永瀬義郎回顧展》(銀座ミキモト)。88年《永瀬義郎の世界展》(茨城新聞主催・京成百貨店水戸店)。91年《永瀬義郎展》

（伊丹市立美術館）。91年《永瀬義郎展》（5.25-7.7 伊丹市立美術館）。93年版画手引書《版画を作る人へ》復刻（夢譚書房）。

長田 国夫

ながた くにお

1911(明治44)年1月1日、豊田郡川尻村(現呉市川尻町)に生まれる。26年呉海軍工廠に入廠、29年同工廠工具養成所高等科卒。32年呉の学校教員を中心メンバーとする水彩画中心の団体「互歩会」が結成され、そのメンバーとなる(45年まで所属)。34年油彩画を始め上京。防水布の加工会社で働いた後二科技塾に通って画技を磨く。35年ごろ、国画会、春陽会、白日会、呉の互歩会など、手当たり次第に出品。36年二科技塾を退学、会社をやめて帰郷。呉海軍工廠製鋼部に復職。38年第2回新文展に「静物」を出品、入選。43年海軍呉人事部第三課に勤務。45年終戦と同時に失職。呉精華高等女学校(50年同女学校ほか2校が合併、清水ヶ丘高等学校となる)の助教諭となる。46年呉画壇の互歩会が発展的に解消して白玄会が組織され参加。47年県立呉第二中学校講師を兼職。50年呉・清水ヶ丘高等学校の校章を創案。54年清水ヶ丘学園を退職。上京して私立潤徳学園に美術科教師として就職。71年同学園を定年退職するも引き続き専任講師として教鞭を執る。77年初めての個展(11.15~20 銀座・はまのや)。81年2回目の個展(9.22~27 銀座・はまのや)。83年精気会を結成、会長となり、同会第1回グループ展(3.13~19 松戸市文化ホール)。第3回個展。85年精気会第2回グループ展(1.29~2.3 松戸市文化ホール)。潤徳学園講師を退く。第4回個展(4.29~5.5 銀座・画廊「春秋」)。86年精気会第3回グループ展(4.8~13 松戸市文化ホール)。54年の上京後は北千住に、56年以降は千葉県松戸市に住んだ。1994(平成6)年8月12日死去。84歳。
96年《長田国夫作品集》刊行。

長田 健雄

ながた けんお

1901(明治34)年5月8日、呉市に生まれる。はじめ呉海軍工廠に勤務。呉在住の日本画家・小田宮華溪に日本画の手ほどきを受けるも洋画への転向を勧められる。21年呉市本通小学校訓導。25年呉市長迫小学校訓導。29年呉市立高等女学校教諭となり、教職のかたわら創作活動。32年第19回日本水彩画展に初出品の「市場附近」「こたつ」で初入選。同年第19回二科展に「金魚の会」を出品、初入選。同年広島洋画協会の結成に参加、創立会員となる。33年日本水彩画会20周年記念展に「山間」「餅を焼く」を出品、受賞。34年日本水彩画会会員。同年第21回光風会展に「整燈」を出品、入選。35年第22回光風会展「病院裏」。36年第23回光風会展「郊外の午後」。37年第1回山水会展に「隠岐三郎岩」を出品、入選。そのほか地元関係では、イーゼル会主催美術展覧会、呉ポペニエ会、広島県美術展覧会(広島県美術協会主催)、広島蒼原会展、互歩会洋画展などにも出品した。彫刻家・上田直次(1880-1950)は母方の遠戚という。呉市宮原通に住んだ。1940(昭和15)年3月18日死去。38歳。
40年長田健雄先生追慕会主催《長田健雄遺作展》(4.28~29 中国新聞社呉支局楼上)。41年第5回一水会展(9.23~10.4 東京府美術館)に遺作「残雪」を展示。同年第10回互歩会洋画展(11.2~3)に遺作「雪景」を展示。

中西 利雄

なかにし としお

1900(明治33)年12月29日、東京都京橋区霊岸島(現在の中央区新川)に生まれる。16年中学在学中から日本水彩画会仮研究所に研究生として通い、日本水彩展に出品。22年東京美術学校に入学。

24年在学中の第5回帝展に「盛夏麗日風景」を出品、初入選(以後、官展には第13~15回帝展、紀元二千六百年奉祝展に出品)。27年東京美術学校卒。引き続き1年間、研究科に在籍。28年渡仏。パリに滞在、31年まで絵画研究。この間、滞仏中の小磯良平と仏、英、伊を巡遊。31年帰国。32年第19回日本水彩展に滞欧作27点を展示。34年第15回帝展出品の「優駿出場」で特選。36年小磯良平、猪熊弦一郎、佐藤敬、脇田和、三田康、内田巖、伊勢正義、鈴木誠とともに、ただ一人水彩画家として「新制作派協会」の創立に加わる。この年初めての個展《中西利雄画伯第1回水彩展》(5.26-31 東京銀座・日動画廊)を開く。広島市の佐渡富江と結婚。37年画集《中西利雄作品集》(春鳥会)刊行。43年自著《水絵一技法と随想一》(総合美術研究所)刊行。48年《中西利雄個展》(7.18-22 東京銀座・日動画廊)。夫人が広島市出身ということもあり、しばしば当地を訪れ水彩画の指導に当たった。東京都中野区桃園町に住んだ。新制作派協会会員。1948(昭和23)年10月6日死去。47歳。
49年第13回新制作派展に遺作22点が展示される。53年毎日新聞社主催《中西利雄遺作展》(3.14-20 東京銀座・松坂屋、以下、下関、北九州、福岡、佐世保、大阪、津、名古屋、酒田の各市でも開催)。同年猪熊弦一郎・伊勢正義・三田康・脇田和共同編集の遺作集《中西利雄》(遺作集・頒布後援会)刊行。55年旧著《水絵一技法と随想一》を《水絵の技法》(美術出版社)と改題して再刊。57年《中西利雄水彩画展》(2.26-3.10 広島市八丁堀・福屋)。78年瀬戸内美術館連絡協議会共同主催《水彩画の巨匠・中西利雄展》(3.3-7.9 広島、香川、岡山、徳島の公立美術館等を巡回展示)。

秦森 康屯

はたもり こうとん

1923(大正12)年11月9日、豊田郡長谷村(現在の三原市小坂町)に生まれる。本名は晃。36年広島県立忠海中学校(現在の県立忠海高校)入学。当時、同校に勤務していた戸塚孝三郎(光風会会友=当時、のち会員)に師事。同級生に岡崎勇次(のち光風会会員)。42年木原国民学校で代用教員(~43年)。43年大阪中之島洋画研究所に入る。この年朝鮮半島から満州(中国東北部)に写生旅行。44年教育招集のため3ヶ月間下関陸軍重砲部隊に入隊。45年三原での美術協会結成に参加。49年上京、各所の美術研究所に通う。54年大阪に移住。旧陸軍駐屯地の馬小屋を改造したものながら、初めてのアトリエをもつ。同年第22回独立展に初めて出品。55年第8回関西独立展に「ふたり」「しゅうしん」を出品、関西独立賞。56年第9回関西独立展に「二人」を出品、関西独立賞(第一席)。第25回独立展に出品した5作品のうち「仮死誕生」「人々」「観客」で25周年記念賞。62年西宮市甲陽園に新居を構える。67-68年欧州取材旅行。76年金山賞候補美術展に招待出品。
戦後まもなく独立展に出品したが、58年以降、鉄鶏会(関西在住独立展出品者7名で構成、73年まで存続。)に属したほかは無所属を貫いた。西宮市甲陽園東山町に住んだ。1994(平成6)年11月28日死去。71歳。
95年《秦森康屯遺作展》(大阪・ギャラリーなかつみ、広島・天満屋三原店)。98年三原市ほか主催《秦森康屯遺作展》(6.3-22 三原リージョンプラザ)開催。同時に図録刊行。

平山 郁夫

ひらやま いくお

1930(昭和5)年6月15日、豊田郡瀬戸田町北町(現尾道市瀬戸田町)に生まれる。45年広島・修道中学校の勤労働員中、市南部の陸軍兵器支廠で被爆。広島県立忠海中学校に転校。当時、能地村に帰村していた元東京美術学校教授(金工)の大伯父・清水南山(亀蔵)宅から同中学に通学。46年清水南山の勧めにより東京美術学校を受験、日本画科予科に入学。52年同校卒。東京藝術大学

日本画科副手となり、主任教授・前田青邨に師事。53年第38回院展出品の「家路」で初入選。54年第9回小品展(のちの「春季院展」「春の院展」に相当)で奨励賞。55年日本美術院院友に推挙。59年第44回院展出品の「仏教伝来」が画業上の転機となる。61年第46回院展出品の「入涅槃幻想」で日本美術院賞(大観賞)、特待(無鑑査)に推挙。62年第17回春季院展出品の「行七歩」で奨励賞。第47回院展出品の「受胎霊夢」「出現」で二度目の日本美術院賞(大観賞)。東西宗教美術の比較研究のため6か月にわたり欧州留学。63年第48回院展出品の「建立金剛心図」で奨励賞(白寿賞・G賞)、文部省買い上げとなる。64年春季院展出品の「原始の眠」で奨励賞。日本美術院同人に推挙。東京藝大講師となる。第49回院展出品の「仏説長阿含経巻巻五」「続深海曼荼羅」で文部大臣賞。「受胎霊夢」(62年)から「仏説長阿含経巻巻五」(64年)に至る一連の作品に対して第4回福島繁太郎賞。65年日本橋三越で初めての個展。66年東京藝大第一次中世オリエント遺跡学術調査団に参加、4か月にわたりトルコ・カッパドキアの洞窟修道院遺跡の壁画模写。67年法隆寺金堂壁画再現事業に参加、3号壁を担当。68年アフガニスタンから中央アジア各地を巡り仏教伝来の源流を訪ねる取材旅行。以後、毎年のようにシルクロードと各地の仏跡を訪ねる。69年東京藝大助教授。70年日本美術院評議員。73年高松塚古墳壁画の現状模写班の責任者として模写に参加。74年ヴァチカンに「古代東方伝教者」を寄贈、法王パウロ六世に謁見。76年第8回日本芸術大賞(新潮文芸振興会)。78年第63回院展出品の「画禅院青邨先生還浄図」で内閣総理大臣賞。81年日本美術院理事。82年第1回美術文化振興協会賞。88年文化財保護振興財団理事(93年理事長)。ユネスコ親善大使に任命。89年長野県佐久市名誉市民。東京藝大第6代学長(93年再任,95年退官)。90年東京国立近代美術館評議員。91年アンコール遺跡救済委員会第1回アンコール遺跡調査団長。92年日中友好協会第4代会長(～現在)。第41回神奈川文化賞(芸術)。93年芸術振興財団理事長。文化功労者。96年日本育英会会長。日本美術院理事長。フランス政府からレジオン・ドヌール勲章。97年郷里・瀬戸田町に平山郁夫美術館開館。98年文化勲章受章。広島県名誉県民。広島市名誉市民。99年米、スミノエ協会から日本人初のジェームズ・スミソン賞。日本ユネスコ国内委員会会長。01年東京藝大学長に再任(05年退任)。神奈川県鎌倉市二階堂在住。

藤川 九郎

ふじかわ くろう

1900(明治33)年6月28日、豊田郡本郷町に生まれる。戦前は東光会、文展、二科展、日本水彩展などに出品。地元呉では互歩会、呉蒼原会などで活動した。35年第3回東光会展出品の藤川九郎「村落」「風景」入選。同年第22回二科展出品の「トマトのある静物(水彩)」入選。38年第2回新文展出品の「静物(水彩)」入選。46年呉美術協会の設立や発足当初、理事として参画。49年第8回水彩連盟展でみづえ賞。50年第2回広島県美展の審査員を務める(以後、54年第6回展～57年第9回展、66年第18回展の計5回務める)。52年第20回独立展、53年第21回独立展、54年第22回独立展に出品、入選。54年水彩連盟会員に推挙。55年呉市芸術文化功労賞。59年《広島県在住代表美術家展》に招待出品(～63年第5回展)。62年生田正雄、田辺伝、清田内匠と《水彩4人展》(広島八丁堀・福屋)。88年米寿記念《藤川九郎作品集》刊行。呉市中通三丁目に住んだ。水彩連盟会員、広島県美展依頼出品者(無鑑査)。呉美術協会会員。1991(平成3)年12月13日死去。91歳。

船田 玉樹

ふなだ ぎよくじゅ

1912(大正元)年10月29日、呉市に生まれる。本名は信夫。はじめ速水御舟に師事するも、35年御舟死去により小林古径に師事。1936年第23回院展出品の「朝の花」で初入選したのをはじめ、40年第27回展「久地の梅」「豪徳寺の櫻」、41年第28回展「月光(九品佛)」、42年第29回展「をみなへし(芭蕉句意)」を出品、入選を果たした。その一方、日本画の革新をめざす運動にも関わり、38年岩橋永遠らとともに歷程美術協会を結成した。同年の第2回自由美術家協会展に出品。39年同展第3回展(関西展)、40年同展紀元二千六百年記念第4回展(関西展)にも出品。41年岩橋永遠・丸木位里・船田玉樹三人展(東京・松坂屋)。42年同三人展(東京・松坂屋)。戦後の院展には48年第33回展に「雪の九品佛」「毛越寺庫裡」を出品して佳作賞となったのをはじめ、49年第34回展「曉のレモン園」(無鑑査出品)、50年第35回展「春の鐘」、52年第37回展「桜島」、54年第39回展「宇治の春」、55年第40回展「安芸の涅槃山」(奨励賞・白寿賞)、56年第41回展「残照」-奨励賞-,57年第42回展「秋意」、58年第43回展「野の花」、59年第44回「ざぼん」、61年第46回展「二級滝」、62年第47回展「秋吉台」を出品した。戦後は広島県内に活動の舞台を移し、46年呉美術協会の設立に際しては理事として参画。49年第1回広島県美展から依頼出品者(無鑑査)となり、審査員を務めた(以後、50年第2回展～57年第9回展、59年第11回展、61年第13回展、62年第14回展、64年第16回展～68年第20回展、70年第22回展、72年第24回展～77年第29回展、84年第36回展と、都合25回にわたって審査員を務めた)。63年日本美術院院友を辞し新興美術院に移り理事。65年平田春潮らと新興美術院広島支部を結成、75年まで新興美術院に所属、出品した。新興美術院を辞して以後は無所属を通した。68年広島県立美術館協議会委員(77年まで)。戦後は呉市広町大広に住み、のち広島市安佐南区東山本に転居。日本画家・造形作家の船田奇岑はその子息。1991(平成3)年2月4日死去。78歳。

坊 一雄

ぼう かずお

1890(明治23)年12月25日、豊田郡高坂村許山(現在、三原市高坂町許山)に生まれる。旧姓は半田。広島師範学校卒。13年東京美術学校図画師範科卒。北陸地方の学校を転任、教鞭を執るかたわら創作活動。27年洋画研究のため渡仏、アマンジャンに師事。彼地の展覧会に積極的に出品。28年第9回帝展出品の「シテー・ファルゲル」で初入選(以後、30年第11回帝展「農家」、33年第14回帝展「漁港」でも入選)。30年帰国、大阪に住む。清水谷女学校、生野中学校で図画を教えながら創作活動。31年大阪三越で個展。32年大阪マルシンで個展。34年大阪大丸で個展。37年大阪三越で個展。39年大阪三角堂で個展。42年清水谷女学校を退職。同年呉商工会議所、広島・世良家具店で個展。44年賀茂郡賀永村(現在、東広島市及び竹原市にまたがる)に疎開。1948(昭和23)年12月14日死去。57歳。

80年《坊一雄遺作展》(3.?-28 東広島市立美術館)。82年《坊一雄遺作展》(10.?-19 上田画廊)。96年《竹原ゆかりの作家展—木村慶・手島守之輔・坊一雄・南薫造—》(9.28-10.20 たけはら美術館)。

益井 三重子

ますい みえこ

1910(明治43)年8月25日、呉市和庄町(現在の吾妻町)に生まれる。旧姓は林。23年県立呉第一高等女学校に入学。小田宮華溪に日本画を学ぶ。28年第13回広島県美術展覧会に初入選。32年益井英太郎(のちに海軍主計中佐)に嫁す。このころの一時期「草園」

の雅号を使用。33 年舞鶴に転居、京都在住の三谷十糸子に学ぶ。舞鶴転居後も毎年の広島県美術展覧会に出品し続け、35 年同展第 21 回展で広島県美術協会賞。同展には 43 年第 29 回展まで出品。44 年舞鶴から大船に転居。47 年小倉遊亀に師事。48 年ごろから安田靫彦門下の研究会・一士会に参加。51 年再興第 36 回院展出品の「T 夫人」が初入選。以後 97 年春の院展まで、一貫して院展に出品し続けた。53 年日本美術院院友。68 年小倉遊亀門下の研究会・桃蓼会（とうしんかい）が結成され参加。71 年日本美術院特待。79 年横浜美術協会（ハマ展）会員。ハマ展のほかにも女流画家展にも出品。04 年平塚市美術館主催《益井三重子展—気高き人を描いて—》（04.29—05.30 同美術館）。横浜市栄区在住。

三上 巴峡

みかみ はきょう

1901（大正 2）年 11 月 18 日、三次市に生まれる。本名は博。31 年広島県高田郡東原村（現安芸高田市高宮町）出身の日本画家・児玉希望の内弟子となる。34 年軍役に服し、翌 35 年除隊。36 年昭和十一年文展鑑査展出品の「緑庭」で初入選。37 年応召、大陸・南方戦線を転戦。43 年第 2 回大東亜戦争美術展（12.8—19 東京都美術館）で「小休止」が入選。45 年終戦、復員。46 年広島県など主催《新憲法公布記念絵画公募展》（12.7—14 広島市庁舎議事堂）で広島市長賞。47 年《新憲法実施記念美術公募展》（5.7—12 広島商工会議所講堂）で中国新聞社賞。同年夕刊ひろしま主催《第 1 回瀬戸内海美術展》出品の「少女像」で瀬戸内海美術展賞。48 年大潮展に出品の「内海の春」で特選。49 年第 1 回広島県美展で審査員を務める（以降、同展では 50 年第 2 回展から 56 年第 8 回展まで連続して審査員を務める）。この年 49 年第 5 回日展に「吉名村の春」を出品したのはじめ、同展には毎年出品、65 年第 8 回新日展出品の「鳳凰堂」で特選（白寿賞）となった。また戦後、児玉希望、伊東深水、矢野橋村らの日月社展には 50 年第 1 回展から 61 年 12 回展まで出品し、56 年第 7 回展では研究賞を受賞した。個展は、広島市のほか、因島（現尾道市）や三原市でも盛んに開いたほか、郷里・三次市や上下町でも開催。戦後は郷里にあった一時期をのぞき、東京都練馬区豊玉北に住んだ。1985（昭和 60）年 5 月 1 日死去。71 歳。

水船 三洋

みずふね さんよう

1903（明治 36）年、呉市に生まれる。26 年東京美術学校に在学中、第 1 回ガンス社展（10.27—11.3 広島県商品陳列所）に同人の六角紫水、河面冬山、清水亀蔵（南山）らに名を連ねて出品。27 年第 23 回太平洋画会に「静物」を出品。28 年第 5 回白日会展に「静物」を出品。同年第 9 回帝展初出品、初入選。

〔以下、官展出品経過＝28 年第 9 回帝展「婦人像」。29 年第 10 回帝展「卓に寄れる女」。31 年第 12 回帝展「ある畫家とその妻」、32 年第 13 回帝展「こどもの話」、33 年第 14 回帝展「鯉幟」、34 年第 15 回帝展「飛行機」、36 年昭和十一年鑑査展「三裸女の構圖」、37 年第 1 回新文展「まどのへや」、39 年第 3 回新文展「はな」、40 年紀元二千六百年奉祝展「子供の祝」、41 年第 4 回新文展「農夫農婦」、44 年戦時特別展「或る防空指導係」〕。

29 年第 1 回呉ポペニア会展（1.19—21 呉・海工会）に「日比谷小品」「大学構内」を出品。同年水船三洋個展（3.1—？ 呉・海工会）。同年東京美術学校西洋画科卒。同年昭和美術展（4.25—5.15 広島県商品陳列所）に「本をもつ女」を推薦出品。33 年官展に出品する一方で東光会展にも出品、第 1 回展で田中奨励賞。35 年東光会展員に推挙。41 年新文展無鑑査。東京市下落合に住んだ。彫刻家・版画家の水船六洲は実弟。1945（昭和 20）年 12 月 16 日、疎開先の長野県で死去。42 歳。

水船 六洲

みずふね ろくしゅう

1912（明治 45）年 3 月 26 日、呉市に生まれる。呉二中から東京美術学校に進み、36 年同校彫刻科卒。同年横浜市関東学院中等部の教師となり、そのかわり創作活動。同年昭和十一年鑑査展に出品、初入選。

〔以下、官展及び日展出品経過＝36 年文展昭和十一年文展鑑査展「ウクレレを持つ女」。37 年第 1 回新文展「鏡を持つ女」。38 年第 2 回新文展「父」。39 年第 3 回新文展「従軍看護婦像」。41 年第 4 回新文展「江川太郎左衛門像」（特選）。42 年第 5 回新文展「神農像」。43 年戦時特別展「學徒挺身」。46 年第 2 回日展「手套」（特選）。47 年第 3 回日展「草の葉」（招待、特選）。48 年第 4 回日展「少年の唄」。49 年第 5 回日展「斧」（依囑）。50 年第 6 回日展「光あれ」（特選）。51 年第 7 回日展「マリア・マグダレナ」（審査員）。52 年第 8 回日展「ヨブ記 42 章 1—6」（依囑）。53 年第 9 回日展「関東学院院長坂田祐先生像」。54 年第 10 回日展「立っている人」（依囑）。55 年第 11 回日展「傘をさしている人」（依囑）。56 年第 12 回日展「輪廻しをする子」（依囑）。57 年第 13 回日展「鳥」（依囑）。58 年第 1 回新日展「月の暈」（会員）。59 年第 2 回新日展「白夜」。60 年第 3 回新日展「蟲の王様」（審査員）。62 年第 5 回新日展「天使の椅子」（評議員となる）。63 年第 6 回新日展「椅子の唄」。64 年第 7 回新日展「馬頭」。66 年第 9 回新日展「僧衣」（審査員）。67 年第 10 回新日展「燭明り」（内閣総理大臣賞）。68 年第 11 回新日展「指人形」。69 年改組第 1 回日展「鳥の季節」。70 年改組第 2 回日展「紡ぎ唄」（審査員。この作品により翌 71 年芸術院賞）。71 年改組第 3 回日展「挽歌」。72 年改組第 4 回日展「はつ雁抄」。73 年改組第 5 回日展「魚座」（審査員）。74 年改組第 6 回日展「冬の旅」（理事となる。）〕

60 年から 77 年まで関東学院小学校校長を務めた。62 年日展評議員。66 年水船六洲個展（10.10—15 東京・清養堂画廊）。木彫作家として活動する一方、1930 年代中頃から版画を作り始め、日本版画協会展や造形版画協会展などで木版画を盛んに発表した。61 年米バーモント州のマールボロー大学からの招きで渡米、1 年間滞在して版画技術を指導。ニューヨークほか各地で個展を開き好評を得る。62 年日本版画協会会員。水船の木版画は、はじめに刷り込んだ墨の上に不透明水彩絵の具を上塗りするという独創的な方法で、色彩・造形感覚に富むすぐれた作品を数多くのこした。日本彫塑会会員。日本版画協会会員。日本版画協会理事、日展理事を務めた。油彩画家の水船三洋は実兄。東京都世田谷区下馬に住んだ。1980（昭和 55）年 6 月 30 日死去。68 歳。

没後、勲四等旭日小綬章が授与された。

南 薫造

みなみ くんどう

1883（明治 16）年 7 月 21 日、賀茂郡内海村（現呉市安浦町）に生まれる。1907 年東京美術学校卒。イギリスに留学、ボロー・ジョンソンに師事。10 年帰国、有島壬生馬と滞欧記念展（東京上野・竹之台陳列館）。第 4 回文展出品の「坐せる女」で三等賞（14 年第 8 回文展、44 年戦時特別展を除き、50 年第 6 回日展まで毎年出品）。この年雑誌《白樺》ロダン号の表紙をデザイン。11 年日本水彩画会評議員。同年第 5 回文展出品の「瓦焼き」で二等賞。12 年第 6 回文展出品の「六月の日」で二等賞。13 年上京。第 1 回日本水彩画展に「屋根を塗る人」ほか 12 点を会員として出品。第 7 回文展に「春さき」を出品、二等賞。14 年二科会創立会員となるも、出品しないまま辞退（この年の第 8 回文展には出品せず）。15 年第 9 回文展出品の「葡萄棚」で二等賞。この年上京、芝区南佐久間町に住む。16 年インドに取材旅行。第 10 回文展で初めての審査員を務める（官展では 39 年第 3 回新文展まで都合 14 回務める）。18 年大久保百人町に自宅兼アトリエを新築。光風会会員に推挙される。18 年光風会会員。《南

薫造水絵集》(春鳥会)刊行。24年小寺健吉、川島理一郎、辻永らと白日会を結成。25年辻永と朝鮮に写生旅行。27年明治神宮絵画館に「広島大本堂」を納める。29年帝国美術院会員となる。30年台湾美術展審査のため石川欽一郎らと訪台。32年南薫造、辻永両画伯新作油絵小品画展(日本橋・高島屋)。同年東京美術学校教授(43年まで)。35年南薫造個展(4.1-7 広島県産業奨励館)。37年帝国芸術院会員となる。38年南薫造近作洋画展(1.25-29 東京・青樹社, 3.11-20 大阪・阪急百貨店)。39年陸軍嘱託として中国大陸に赴く。40年南薫造近作油絵展(12.20-24 東京・青樹社)。41年南薫造個展(5.6-10 大阪・青樹社)。42年南薫造水彩画新作展(5.12-16 東京日本橋・高島屋)。44年郷里の賀茂郡内海村(当時)に疎開。この年帝室技芸員となる。45年空襲により東京の自宅が全焼、終戦後も郷里・内海村にとどまる。46年芸文文化同人会の顧問となる。同年第1回日展の審査員を務める(48年第4回日展でも審査員)。49年第1回広島県美展の開催に当たり、小林和作とともに顧問としてその運営を指導。1950(昭和25)年1月6日死去。66歳。

54年南薫造画伯遺徳顕彰会主催《南薫造遺作展》(1.6-8 賀茂郡安浦町公民館・自宅アトリエ)。57年広島県・市両教育委員会、中国新聞社主催《南薫造回顧展》(1.11-22 天満屋広島店)。同展開催とともに《南薫造画集》(同画集刊行会編 中国新聞社刊)刊行。71年広島県教育委員会・中国新聞社主催《第1回郷土物故作家展「頼山陽、南薫造、鬘光三人展」》(3.6-21 広島県立美術館)。79年《南薫造展》(8.25-9.3 東広島市立美術館)。83年《南薫造展》(10.15-11.6 広島県立美術館)。90年《ロンドンの青春・前後-白瀧幾之助・南薫造・富本憲吉とその周辺-》(1.3-2.4 ぶくやま美術館)。98年《南薫造展-イギリス留学時代を中心に-》(5.12-6.14 広島県立美術館)。

六角 紫水

ろっかく しすい

1867(慶應3)年3月20日、佐伯郡大原村(現在の江田島市大柿町大原)に生まれる。幼名は仲太郎、のち注多良と改名。紫水は雅号。83年広島県師範学校卒。84年上京、英語や漢学を学ぶかわら、神田神保町で私塾を開く。86年徴兵検査のため帰郷。87年佐伯郡廿日市尋常小学の訓導となる。88年再度上京。狩野友信、結城正明について日本画を習うかわら英語、漢学を学ぶ。89年東京美術学校入学。90年同校選抜試験に合格、専修科に進み小川松民、白山松哉に漆技を学ぶ。92年東京美術学校校友会大会に香合「隅田川」を出品、賞牌を受ける。93年東京美術学校美術工芸科漆工部卒。宮内省調度局に書棚の図案が採用になる。東京美術学校雇となる。六角古宇と結婚、六角家の養子となる。東京美術学校助教授となる。95年彫工競技会出品の「描金菊小箱」で褒状。96年美術学校校友会68大会出品の「醋漿図描金香盒」で賞牌。内務省古社寺保存会の依頼で奥州中尊寺の調査に出張。97年中尊寺金色堂の修復に着手。この年以降、内務省の依頼により国宝指定調査のため、全国各地へたびたび出張。98年岡倉天心らとともに美術学校を辞任。農商務省の依頼により清国の漆液生産調査。02年鳥取、島根、山口各県の古社寺宝物調査の帰路、巖島神社で社殿の塗装を指導。03年農商務省から日本産漆と西洋塗料研究のため、海外実習生として留学の辞令。04年岡倉天心、横山大観、菱田春

草とともに渡米。ボストン美術館に勤務(08年2月まで)。同館収蔵の漆工品の整理・修復に当たる。セントルイス博覧会を調査。08年メトロポリタン美術館に移り、日本関係美術品の整理、修復にあたる。ロンドン、パリ、ドイツ、ロシア、清国を経由して帰国。11年鉄道院嘱託(車両塗装)。14年松田権六、金沢から上京して一時六角家に寄宿。17年東京美術学校嘱託。22年平和記念東京博覧会審査員。23年学術研究のため朝鮮・京城(いまのソウル)に出張。24年東京美術学校教授。25年漆工芸研究のため中国に出張。工芸齊々会結成に参加。26年東京帝大から楽浪古墳発掘調査を委嘱。朝鮮総督府から楽浪漆器の整理を依頼(43年まで)。27年第8回帝展出品の「方盆(刀筆の行通い)」が一部マスコミにより代作の嫌疑をかけられ、以後1年余にわたり紛糾。28年東京美術学校で楽浪漆器研究試作展覧会(5.5-6 同校講堂)。第9回帝展審査員(以後、29年第10回帝展~32年第13回帝展、42年第5回新文展、43年第6回新文展で審査員)。29年一昨年来の代作嫌疑事件は事実無根と判明。関係者一同、上野精養軒に集合、和解成立。30年第11回帝展出品の「暁天吼號之圖漆器手箱」で帝国美術院賞。33年商工省主催輸出工芸展覧会審査員。34年勲六等瑞宝章。40年紀元二千六百年奉祝展にアルマイトが器胎の実験作「漆畫爆撃行(アルマイト應用研究)」を出品(42年第5回新文展にも「アルマイト平脱文菊花色紙笥」を出品)。41年帝国芸術院会員。43年東京美術学校教授を辞す。44年会津若松に疎開。46年第1回日展審査員(46年第2回展、48年第4回展で審査員)。晩年は東京都杉並区西荻に住んだ。東京芸大漆工科教授、漆芸家・六角大塚(旧姓田中、本名頼雄)は養子。1950(昭和25)年4月15日死去。83歳。

86年《近代日本工芸の巨匠・紫水と南山展》(5.17-6.8 広島県立美術館)。94年村野夏生《漆の精-六角紫水伝-》(構想社)刊行。生誕地の江田島市大柿町大原にある大柿地区歴史資料館には紫水に関する資料展示コーナーがある。

若山 為三

わかやま ためぞう

1893(明治26)年3月20日、広島市天満町に生まれる。広島県立忠海中学校卒。満谷国四郎、中村不折に師事。27年第5回春陽会展に「朝」「浴後の幼児」「新聞を読む女」「少女の像」「花」を出品、春陽会賞。30年第26回太平洋画会展に「二人の裸婦」「花」(一)(二)「裸婦」「母と子」を出品、太平洋画会賞。太平洋画会会員に推挙される。32年田中善之助、國盛義篤とともに大阪を拠点とする新興美術協会の設立に関わる。34年春陽会会員に推挙される。同年若山為三個展(7.11-15 大阪・新美術新論画廊)。35年若山為三個展(7.23-30 大阪・新美術新論画廊)。若山為三個展(若山為三画伯後援会主催 11.29-30 広島市公会堂)。37年若山為三後援画展(7.15-? 名古屋市公会堂)。38年若山為三洋画展(1.12-17 大阪・新美術新論画廊)。39年第3回新文展に「少女像」を出品初入選。40年紀元二千六百年奉祝展に「少女像」を出品。同年若山為三日本画展(11.1-6 大阪・阪急百貨店)。44年戦時特別展に「葡萄」を出品。57年若山為三個展(4.12-17 天満屋広島店)。半世紀にわたる画業から28点を展示。奈良県、東京都に住んだ。1961(昭和36)年1月28日死去。68歳。

第 2 部 《沿線美術のいま》 出品作家の略歴

- ① この略歴は、平成 19 年 7 月末日現在における本展出品作家の略歴を記したものである。
- ② この略歴は、一部の作家を除き、原則として本展出品作家本人から提出された“作家歴”をもとに美術館が編集、取りまとめたものである。
- ③ 配列は、50 音順とした。
- ④ 年次表記は、生没年に限り西暦と和年号を併記したほかはすべて西暦で表記した。

安久 一郎

あんきゅう いちろう

1928(昭和3)年6月6日、呉市古江町に生まれる。呉市役所に勤務するかたわら創作活動(57年から東京事務所に移る)。46年呉美術協会の母体となる裸心会に参加。50年ヤネウラ美術同人に原田繁、笹賀捨雄、松谷茅らとともに参加。54年全国青年大会に出品の「静物」で文部大臣賞。55～66年自由美術展、新象展に出品。63年新構造展に出品、同展で奨励賞、研究賞、展賞などを受賞。会員となり、以後、一貫して同展に出品。60年初めての個展を東京銀座・村松画廊で開催。以後、櫛画廊、アートホール、日辰画廊、呉市立美術館、呉そごう、相模原トニーチ、舞鶴市、横浜リープギャラリー、銀座すどう美術館などで34回を超える個展を開催。98年《安久一郎・笹賀捨雄・松谷茅三人展》(8.19-23 呉市立美術館)を開催。初期の写実画風から、のちしだいに抽象画に転じた。日本美術家連盟会員、新構造社委員。東京都町田市に住んだ。2003(平成 15)年3月29日死去。74歳。
05年有志の企画により《「安久一郎」を囲む仲間達》展(02.23-27 呉市立美術館)が開催される。

今井 眞正

いまい まきまさ

1961(昭和 36)年6月 23 日、陶芸家・今井政之の長男として京都市に生まれる。86年東京藝術大学彫刻科卒。同大在学中、久米桂一郎賞受賞。87年大阪・不二画廊で初めての個展。88年東京藝大大学院美術研究科彫刻専攻修了。同大非常勤講師として勤務。93年父・今井政之を中心とする筍豊会(広島八丁堀福屋)に出品(以後、毎回出品)。95年花の陶展新人賞(96年奨励賞)。97年《個展一生・焰・宙一》(呉そごう)。98年《心と炎について》(岡山高島屋)に出品。01年たけはら美術館主催《竹原ゆかりの作家展—今井眞正—》。02年京都市芸術新人賞。03年京都市芸術新人賞受賞記念展(京都芸術センター)。04年東広島市立美術館主催《山陽・山陰路の現代陶芸》展に招待出品。現在、京都府工芸美術作家協会会員、広島市立大芸術学部非常勤講師、広島修道大非常勤講師。京都市在住。

岩崎 守

いわさき まもる

1929(昭和4)年4月16日、呉市長ノ木町に生まれる。46年復員。48年呉市立片山小学校に務める。48年第7回水彩連盟展に初入選。57年第9回広島県美展で呉市議会議長賞。65年第24回水彩連盟展でスター賞。66年同連盟準会員に推挙。67年同連盟会員に推挙。68年同連盟展第27回展審査員(以後、数回審査員)。69年から広島県教育委員会指導主事、管理主事を務め、のちに再び学校現場に転じる。79年水彩連盟会員選抜サンスイ展に出品(～81年)。91年熊野町立第一小学校長を最後に教壇を退く。92年呉市立美術館で個展開催。呉美術協会役員、呉市美術公募展審査員などを務める。呉市長ノ木町に住んだ。1993(平成5)年8月4日死去。64歳。
没後、勳五等瑞宝章を授与される。

江子 光男

えご みつお

1937(昭和 12)年4月3日、呉市宮原三丁目に生まれる。89年大洋会で奨励賞受賞。91年第46回呉市美術公募展で呉市教育委員会賞。同年太平洋会を退会。同年広島県警察美術展で優秀賞、翌年は同展で佳作賞受賞。99年日展初入選。00年には日洋展で奨励賞。01年日洋展会員に推挙。日展、日洋展を中心に活動。呉市焼山中央在住。

大路 誠

おおじ まこと

1976(昭和 51)年3月3日、大阪市に生まれる。99年京都造形芸術大学芸術学部美術家洋画コース卒。卒業制作展で学長賞。同年広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程絵画専攻(油絵)入学。00年雪舟ますだ美術大賞展に入選。同年雪梁舎フィレンツェ賞展で優秀賞。04年同大大学院同科博士課程後期課程総合造形芸術専攻単位取得満期退学。同年4月呉市(当時＝安芸郡川尻町)の野呂山芸術村に入村。現在、同村を活動中。各地各種の展覧会に積極的に出品するほか、すでに個展開催は多次に及ぶ。呉市川尻町西在住。

大畑 稔浩

おおはた としひろ

1960(昭和 35)年10月8日、島根県益田市に生まれる。84年多摩美術大学を中退、東京藝術大学に入学。87年ヨーロッパに遊学。88年東京藝大美術学部絵画科油画専攻卒。同大油画技法材料研究室入学(～90年修了)。同年第64回白日展に初出品、白日賞・文部大臣奨励賞。89年第65回白日展でT賞。91年東京セントラル美術館絵画大賞展に招待出品、佳作賞。96年広島県安芸郡川尻町(当時、現在呉市川尻町)の野呂山芸術村に入村。同年第1回雪舟ますだ美術大賞展招待。同年中国新聞ほか7紙に掲載の新聞小説《天涯の花》の挿絵を担当。同年韓国・ポスコギャラリーで開催の《現代リアリズムでの招待》展に出品。98年前田寛治大賞展で佳作賞第一席となる。同年白日会会員、現代写実絵画研究所同人となる。04年3月川尻町野呂山芸術村を退村、茨城県に転居。07年第83回白日会展で内閣総理大臣賞。大畑稔浩洋画展(日本橋三越)。茨城県行方市玉造町在住。

応和 義明

おうわ よしあき

1936(11)年4月1日、呉市に生まれる。63年自由美術協会展傘下の団体、広島西グループ展に出品し始める。77年自由美術展に初入選。またこの年から自由美術展出品者らでつくるグループ黄人展(68年3月第1回展)に毎回出品。80年第35回呉市美術公募展で呉市教育会賞。翌81年呉美術協会会員に推挙。98年自由美術展で佳作賞。翌99年自由美術協会会員に推挙。77年の自由美術展への初入選以来、今日まで一貫して同展に出品し続けている。呉市本通在住。

岡本 隆寛

おかもと りゅうかん

1939(昭和 14)年7月 29 日、呉市広町に生まれる。64 年愛媛大学教育学部美術科卒。県立学校教諭を務められた後創作活動。岡崎勇次に師事。72 年第 58 回光風会展に初入選。翌 73 年改組第 5 回日展に初入選。77 年4月から 87 年3月まで広島県立美術館専門員、学芸員、学芸課長を歴任。この間、83 年には南薫造展の企画運営を手がける。また 86 年小林千古(廿日市市地御前出身)の足跡をたどり渡米、調査研究にあたる。87 年4月再び県立高校教諭として教壇に立つ。90 年光風会会友。94 年アジア・ひろしま芸術大賞展で佳作賞。同年第4回ひろしま美術大賞展で佳作賞。第5回同展でも佳作賞。97 年光風会会員。03 年韓国・鎮海市と呉市との交流事業《韓日美術交流展》に招待出品。04 年呉市文化功労賞。07 年八千代の丘美術館入館作家として4月から同館で個展を開催中。現在、日展会友、光風会会員、呉美術協会会員。同協会庶務。呉市横路在住。

越智 泰二

おち たいじ

1941(昭和 16)年 12 月 15 日、呉市に生まれる。94 年第 49 回呉市美術公募展に初出品、初入選。95 年第 50 回同展で呉美術協会賞。98 年第 53 回同展で呉市教育会賞。99 年美術協会会員に推挙。00 年光風会会員・佐々木寅夫(広島市在住)に師事。01 年第 87 回光風会展に初出品、初入選。以後毎回入選。02 年第 54 回広島県美展出品の「帰港」で大賞。04 年改組第 34 回日展出品の「帰港」で初入選。06 年第 92 回光風会展広島展で広島光風会奨励賞。同年改組 38 回日展に「繫船」入選。呉市東三津田町在住。

落合 規子

おちあい のりこ

1942(昭和 17)年8月 22 日、呉市に生まれる。旧姓は浜崎。広島大学在学中の 63 年第 18 回呉市美術公募展で呉市教育委員会賞。翌 64 年同展で呉市長賞。65 年広島大学教育学部卒。公立小学校の教諭として勤務したのち創作活動(水彩画)。66 年第 25 回水彩連盟展でみずぬぎ賞。翌 67 年同連盟準会員に推挙。70 年同連盟会員となる。96 年教職を退く。03 年 04 年呉市立美術館美術入門教室の講師、05 年から呉市宮原公民館の絵画講師を務める。安芸郡坂町小屋浦在住。

郭 継英

かく けいえい GUO JI YING

1959 年8月 25 日、中華人民共和国内蒙古自治区に生まれる。82 年内蒙古師範大学美術学部中国画専攻卒。86 年北京中央美術学院工筆人物画研究室修了。87 年内蒙古師範大学美術学部講師。89 年全国第7回美術作品展で内蒙古優秀作品賞。90 年美術研究のため来日。91～93 年横浜・中国画廊、銀座・永井画廊などで個展。94 年第 20 回春期企画展に入選。第 30 回亜細亜現代美術展でアジア航空国際賞(95 年第 31 回展努力賞、96 年第 32 回展亜細亜美術交友会国際賞)。95 年上海国際展海外選抜賞(中国・上海美術館)。96 年多摩美術大学大学院日本画修士課程修了。第 14 回上野の森美術館大賞展入選(一次賞候補)。97 年個展(4.15-20 埼玉県立近代美術館第3展示室)。同年4月野呂山藝術村に入村。98 年中国政府教育部の依頼により北京で講義(99 年も)。第4回当代工筆重彩画大展(北京・中国美術館)で丹青銀賞。00 年野呂山藝術村・郭継英画展(7.22-9.3 野呂山藝術村ギャラリー)。01 年第1回中国重彩画大展で学術賞。個展(三越銀座店美術画廊)。郭継英重彩画展(11.16-21 広島・八丁堀天満屋)。02 年北京・中央美術学院中国画系で講義。首都師範大学美術学部客員教授と

なる。中国新聞社主催《広島の絵画 110 人展》に招待出品。02 年呉市立美術館平成 14 年度第3期所蔵品展()で作品 12 点を特陳。04 年3月野呂山藝術村を退村。同年呉市・川尻町合併記念《野呂山藝術村の作家たち》展(4.10-5.5 呉市立美術館)で作品 7 点が展示される。中国に帰国。技法書《現代重彩画技法・郭継英》(蒋采苹主編・現代現代重彩画技法叢書所収 河南美術出版社)刊行。「存在-8(眩)」(03 年作)を呉市立美術館に寄附、同館収蔵品となる。現在、中国藝術研究院客座教授、中国人民大学徐悲鴻藝術学院兼職教授、首都師範大学美術学院教師。北京市海澱区在住。

梶原 誠

かじわら まこと

1938(昭和 12)年2月 22 日、呉市川尻町(当時は豊田郡川尻町)に生まれる。はじめ宇根元警に師事。70 年平和美術展に出品し始める。以後毎年出品。82 年第 37 回呉市美術公募展で呉美術協会賞。85 年尾道の四季展に出品し始める。以後たびたび入選。同年の第 37 回広島県美展に入選。同年 86 年示現会に出品、入選(87, 87, 90 年も入選)。同年現創展に出品、新人賞(86 年会員。95 年特別賞)。91 年呉市立美術館での初めての個展開催(6.12-16)。以後、同館でたびたび個展開催。92 年日本風景美展で大賞。同年日洋展に出品し始める。94 年広島市現代美術館主催・第3回公募「広島の美術」(2.5-4.3)に出品の「新しい街と弥山(宮島)」が入選。同年有楽町・そごうで個展。同年中国新聞社主催第4回ひろしま美術大賞展(11.17-22 広島八丁堀・福屋)に佳作入選。01 年銀座・ギャラリー・ムサシで個展。03 年上野の森大賞展に出品、入選。06 年第 20 回日洋展で奨励賞。07 年日洋会会員となる。現在、絵画グループ(未知)を主宰。呉美術協会会員。東広島市八本松町在住。

金原 徳子

かねはら とくこ

1919(大正 8)年5月 31 日、京城に生まれる。旧姓は相沢。41 年女子美術専門学校(現女子美術大学)卒。卒業と同時に京城で美術教師となる。45 年終戦にともない呉に移住。中学校で教鞭を執るかたわら創作活動。66 年形象派展第 14 回展で新人賞。同年呉美術協会会員。67 年形象派美術協会会友。68 年形象派展第 16 回展で NDI 賞。69 年形象派展準会員。70 年形象派展第 18 回展で形展賞。71 年形象派美術協会会員。73 年形象派展第 21 回展で愛知県知事賞。77 年形象派展第 25 回展で形展特賞。80 年同展第 28 回展で初めて審査員(以後、84 年第 32 回展、85 年第 35 回展、90 年第 38 回展の計4回)。85 年台北市立美術館国際展出品。85 年呉市芸術文化功労賞。86 年形象派展芸術大賞。92 年環境保全美術協会特別会員。93 年呉市立美術館で 15 回目の個展開催。00 年形象派展福山賞。呉市中央六丁目に住んだ。呉美術協会理事。2002(平成 14)年 11 月 4 日死去。83 歳。

川上 靖司

かわかみ やすし

1938(昭和 13)年1月 31 日、呉市伏原町に生まれる。61 年京都市立芸術大学西洋画科卒。呉市で教職に就くかたわら創作活動。64 年の第1回個展以来、これまでに 20 回に及ぶ個展を開催。70 年のヨーロッパ 14 カ国への取材旅行をはじめ、72 年インド、78 年、93 年、00 年ヨーロッパ、98 年ギリシアなど、たびたび取材旅行。呉市古新開在住。

久間 祐子

きゅうま ゆうこ

1947(昭和 22)年3月 18 日、呉市両城町に生まれる。85 年形象派美術協会に入会。86 年同協会会友に推挙。同協会芸術選奨。87 年

形象派展形展特賞。88年日本デッサン協会賞(形象派展)。第43回呉市美術公募展で呉市教育委員会賞。翌89年呉美術協会会員に推挙。形象派美術協会準会員に推挙。90年形象派選抜国際展米ボルチモア出品。91年形象派展で愛知県知事賞。94年形象派美術協会会員に推挙。95年台湾台北市での形象派選抜国際展に出品。96年形象派展で坂角ギャラリー奨励賞。98年形象派展で形展特賞。同年形象派選抜国際展米フィラデルフィア出品。03年呉美術協会理事。05年形象派選抜国際展台湾、伊ソレント出品。06年ギャラリーG(広島)で個展。07年韓国鎮海市美術展に呉美術協会から招待出品。現在、形象派美術協会会員、呉美術協会会員。呉市吾妻在住。

クレイン, ミネ

くれいん, みね Miné Crene

1917(大正6)年9月18日、呉市長ノ木町に生まれる。旧姓は澤原。55年ロックフェラー一家と並ぶアメリカの大富豪コーネリアス・クレインと結婚し、アメリカに渡る。74年ニューヨークのピーター・フラナガン画廊で初めての個展。75年同画廊で個展。同年東京銀座・ミキモトホールで日本での初めての個展。76年ジョージア州ジェキル・アイランド・アートセンターで個展。同年ワシントン D.C.での《ワシントン・インターナショナル・アートフェア》に出品。同年ニューヨークのピーター・フラナガン画廊で個展。77年東京銀座・ミキモトホールで2回目の個展(以後、80年、82年、84年、86年、91年も同所で開催)。同年パリのギャルリ・レイモンド・ダンカンで個展。78年《1978年をリードするアメリカ女流アーティスト12人》の一人に選ばれる。同年スイス・チューリッヒのギャラリー・スージー・ブルナーで個展。79年パリのギャルリ・ドロウアで個展。84年大型詩画集《ミネ・クレインの四季》(講談社)、《エルムトリー物語》(文化学園出版局)を出版。象徴化された細密画による詩情あふれる画面に特徴がある。1992(平成4)年5月13日ニューヨークで死去。74歳。

ちなみに、谷川俊太郎の詩に《ミネ・クレインの絵によせて》がある。また、この詩は後藤丹の作曲により合唱曲にもなっている。

黒川 清雪

くろかわ せいせつ

1931(昭和6)年12月4日、呉市内に生まれる。本名は博雄。50年第2回広島県美展で広島市長賞。59、60年第15、16回呉市美術公募展で呉美術協会賞。61年第13回広島県美展で呉市教育委員会賞。62年第9回日本伝統工芸展に出品。65年第17回広島県美展で広島県知事賞。63年初めて呉市美術公募展審査員を務める。70年広島県美展依頼出品者(無鑑査)となる。80年呉市芸術文化功労賞。71年呉総合福祉センターのロビー壁面のために陶壁「大洋の恵み」を制作、寄贈。72年呉市天応公民館玄関壁面のための陶壁「和」を制作、寄贈。同年第24回広島県美展工芸部門の審査員に初めて委嘱される(以後、第28、34、38、42、46回展審査員)。81年呉市立美術館運営審議委員(～06年まで)。82年呉市野外活動センターに陶板「友愛」を制作、寄贈。87年上田流和風堂主催《第1回広島県茶の湯工芸展》指名作家として「青磁香炉」を制作。89年天皇皇后両陛下御来呉の際、茶碗を制作、献上。90年上田流和風堂主催《第2回広島県茶の湯工芸展》指名作家として替茶碗「赤楽」を制作。92年広島ホームテレビ文化大賞受賞。93年くれオーク賞受賞。93年上田流和風堂主催《第3回広島県茶の湯工芸展》指名作家として「青磁香炉」を制作。95年広島文化振興基金の広島文化賞受賞。広島市及び呉市内でたびたび個展。焼成窯は「禅定庵呉峯窯」。呉美術協会会員。呉市天応西条在住。

其阿弥 赫土

ごあみ かくだ

1925(大正14)年11月20日、呉市西原町に生まれる。42年東京美術学校入学。46年同校退学(四退)、47年呉市立阿賀中学校で教鞭を執るかたわら創作活動。この間、49年第1回広島県美展出品の「二河峡」で広島県知事賞。翌50年第2回広島県美展に出品の「聞聴山音之図」で広島県知事賞を連続受賞。52年第2回新制作展(日本画部)に出品、初入選(～67年まで出品)。同展春季展では5回受賞。54年教職を退く。57年新制作日本画5人展を善鳩人、広田堅、宮川啓魚(啓五)、堀川年とともに天満屋広島店で開催。同年研究のため、居を京都に移す。58年呉公民館で個展。以後、呉市内や自宅を会場にたびたび開催。59年広島八丁堀・福屋で個展。以後、広島市内でもたびたび開催。60年京都から奈良に移住。63年奈良から呉に移る。64年第16回広島県美展ではじめて審査員を務める(以後、65年第17回～68年第20回、70年第22回、72年第24回～76年第28回、78年第30回、82年第34回、86年第38回、88年第40回、91年第43回、93年第45回の都合17回務める)。68年呉市勤労文化会館に展示する「山肌」を同館に納める。69年広島ギャラリー・ヨコタで宮川啓五、堀川年とともに日本画3人展を開く。80年～95年広島県立美術館協議会委員。81年呉市立美術館運営審議委員(～99年)。88年広島県美展運営審議委員(任期2年、57年、61年)。91年広島県美術展検討委員会委員(～93年)。93年呉市伏原から賀茂郡黒瀬町(現東広島市)に転居。94年其阿弥赫土新作日本画展(9.13-18 三越広島店)。同時に《其阿弥赫土1994個展作品集》発刊。現在、会派は無所属。呉美術協会会員。東広島市黒瀬町在住。

古庵 千恵子

こあん ちえこ

1933(昭和8)年8月28日、呉市浜田町に生まれる。66年千庵窯を開窯。68年第20回広島県美展で県知事賞。69年同展第21回展、70年同展第22回展で呉市長賞を連続受賞。71年女流陶芸公募展で女流陶芸大賞。同年から広島県美展依頼出品者(無鑑査)。78年第30回広島県美展で初めて審査員を務める(以後、第34、37、44、47回展審査員)。83年日展会友、光風会評議員、同審査員。90年光風会展で杉浦非水賞。96年呉市芸術文化功労賞。00年光風会理事。01年イタリア・ファルネーゼ公園芸術祭典でファルネーゼ公園アートソサイエティ大賞。光風会展などの公募展への出品をはじめ、各地各種の陶芸展に招待出品。作品は、広島県立美術館、東広島市立美術館、ふくやま美術館、広島大学などに収蔵。呉美術協会会員。呉市焼山松ヶ丘在住。

小林 康美

こばやし やすよし

1918(大正7)年3月23日、倉敷市玉島町に生まれる。41年呉市立学校の教員として勤務するかたわら、水彩画を志す。53年第12回水彩連盟展に初入選。54年呉美術協会会員。55年第14回水彩連盟展で資生堂賞。翌56年同連盟会友。57年同準会員。60年同会員。77年個展開催。78年呉市立小学校を退職。87年呉市芸術文化功労賞。水彩連盟の会員として毎年出品している。呉市立美術館入門教室の講師を二期、NHK文化センター広島の講師を5年にわたり務めた。呉市内神町在住。

財満 進

ざいま すすむ

1952(昭和27)年6月9日、東広島市西条西本町に生まれる。73年嵯峨美術短期大学専攻科(陶芸)卒。74～79年大阪市住吉区我孫子に在住の陶芸家・東憲に師事。81年豊田郡安芸津町風早(現

在は東広島市)に陶房(風陣窯)を設けて独立。82年第34回広島県美展に初入選。84年改組第16回日展に初出品,初入選(以後、たびたび入選を重ねる)。85年第25回現代工芸美術展に初出品,初入選(以後、入選を重ねる)。89年改組第21回日展出品の「風標」で特選。同年双三郡三良坂町(現在は三次市)平和公園内の陶壁を制作。90年改組第22回日展に無鑑査出品。同年豊田郡安芸津町風早(現東広島市)にある祝詞山八幡神社の万葉陶壁を制作。96年現代工芸会員賞。07年東広島市立風早小学校に陶板「風の子」を寄贈。現代工芸本会員,日展会友。東広島市安芸津町風早在住。

坂本 保

さかもと たもつ

1921(大正10)年5月21日,呉市に生まれる。

56年武蔵野美術大学卒。58年第12回二紀展に出品,初入選。59年第13回二紀展で受賞。62年第5回現代日本美術展に出品。64年第6回現代日本美術展に出品。同年二紀会同人に推挙。65年第19回二紀展で受賞。67年二紀選抜展で佳作賞。69年第23回二紀展で二紀会同人賞。71年第25回二紀展で二紀会同人努力賞。75年二紀会会員に推挙。76年委員に推挙。東京都在住。

笹賀 捨雄

ささが すてお

1931(昭和6)年4月2日,呉市広町に生まれる。50年原田繁,安久一郎,松谷茅,らとともにヤネウラ美術同人に参加。51年第6回呉市美展で奨励賞。52年同展市長賞,53年同展美術協会賞。55年自由美術展に初出品。以後今日まで連続出品。58年第13回広島県美展で庄原市長賞,61年第13回展で呉市長賞。68年グループ黄人展を結成,以後毎年出品。74年自由美術協会会員。76年黄人8人展を東京・愛宕山画廊で開催,出品。82年東京銀座・櫟(くぬぎ)画廊で個展(85年まで毎年開催)。92年呉そうごう美術画廊で個展。97年呉市芸術文化功労者。98年《安久一郎・笹賀捨雄・松谷茅三人展》(8.19-23 呉市立美術館)を開催。07年第71回自由美術展で平和賞。このところヒロシマの悲惨をテーマに抽象表現に挑んでいる。現在,自由美術協会広島地方事務所担当。呉美術協会監事。広島市安芸区矢野西在住。

佐藤 良男

さとう よしお

1924(大正13)年9月12日,福山市大国町に生まれる。42年東京美術学校師範科入学,47年同校卒。福山誠之館高等学校に勤務。49年から福山市立中学校,県立福山工業高等学校,県立福山葦陽高等学校等に勤務。55年第7回広島県美展で福山市長賞。56年同第8回展で因島市議会議長賞。58年同第10回展で広島県知事賞。60・63年同第12・15回展で福山市議会議長賞。64年第7回新日展に「休息」が入選。徹底した写実主義による油彩画や水彩画をよくした。68年県立高校教諭から新設の広島県立美術館に転じ,専門員,事業課長,副館長を歴任。展覧会事業の開催,美術品の収集などを手がけた。82年同館を定年退職,新設の呉市立美術館長に就任,美術品の収集などにあたった。88年第40回広島県美展審査員。91年広島県美術展検討委員会委員。96年12月呉市立美術館長を退任。97年福山・しぶや美術館監事に就任。広島市南区に住んだ。1999(平成11)年12月16日死去。75歳。

01年《佐藤良男回顧展》(10.3-12.24 福山・しぶや美術館)。

沢田 満春

さわだ みつはる

1947(昭和22)年7月27日,大阪府に生まれる。77年ブリュッセル王立美術大学絵画科卒。同大卒業制作展でブリュッセル賞。ヨーロッパ現代美術コンクールで受賞。78年ブリュッセル大学大学院美学研究科修了。83年現代の裸婦大賞展で優秀賞。山総美術コンクールで優秀賞。89~94年パリ市立モンパルナス美術学校造形美術細密画修了。90年ベルギー・オステンドグランプリ展で金賞。フランス・ヴィトリー国際コンクールで賞候補。92年オステンドグランプリ展で金賞。ヴィトリー国際コンクールで賞候補。93~94年パリ日仏文化センター絵画部講師。93年イタリア・ミラノ国際コンクール(アガチ記念賞展)でグランプリ。モナコ国際グランプリで賞候補。エコール・ド・パリ展で最優秀賞。サルグミュン国際グランプリで受賞。オティス国際展でグランプリ。94年イタリア・ヨーロッパ国際大賞展でグランプリ。95年フランス・ユネ国際展で金メダル。96~97年パリ国立美術大学客員教授。98年5月川尻町・野呂山芸術村入村。02年5月野呂山芸術村退村。兵庫県尼崎市在住。

島田 戴造

しまだ たいぞう

1943(昭和18)年12月8日,呉市に生まれる。65年早稲田大学第一政経学部経済学科卒。83年第38回呉市美術公募展(日本画)に初入選,以後入選7回。この間,89年第44回展で受賞。86年広島県美展に初入選,以後入選7回。この間,87年第39回展で日本画部門大賞。93年第78回院展に初入選,以後95,97年入選。97年院友推挙。98年第2回雪舟の里・総社墨彩展で奨励賞。02年中国新聞社主催・広島の絵画110人展に招待出品。91年心の詩画展,96年広島八丁堀福屋美術画廊での個展のほか,広島県北地域でたびたび個展開催。呉市本通在住。

清水 勇

しみず いさむ

1930(昭和5)年5月10日,呉市に生まれる。53年自由美術展出品(55年まで)。56年グループ「存在」を結成,出品(60年まで)。66年広島市平和美術展,広島県美術会議展に出品(70年まで)。67年自由美術展に再び出品し始める。68年第1回黄人展(ピカソ画廊)に出品。以後,毎回出品。69年第32回自由美術展で佳作家賞。71年自由美術協会会員に推挙。広島県総合美術作家展に出品(73年まで)。80年第23回安井賞展に出品(自由美術協会から推薦)。同年艸土会展(広島・スズカワ画廊)に出品(81年まで)。同年自由美術会員4人展(東京・日本橋画廊)。84年の自由美術展で平和賞。85年第19回現代美術選抜展に出品(文化庁主催)。86年の自由美術展で翹光賞。87年個展(東京・日本橋画廊)。88年第21回現代美術選抜展に出品。91年笹賀捨雄・清水勇 自由美術協会会員二人展(呉市立美術館)。広島市南区南大河町に住んだ。1996(平成8)年10月3日死去。66歳。

07年《描写の可能性を視る-灰谷正夫・清水勇・小間野生穂-》展(3.27-4.1 広島県立美術館県民ギャラリー)。

清田 内匠

せいた たくみ

1925(大正14)年8月18日,呉市宮原に生まれる。45年広島師範学校卒。公立学校教員を勤めるかたわら創作活動(水彩画)。54年第13回水彩連盟展に初入選。同年第10回呉市美術公募展(洋画)で呉市議会議長賞。田辺伝との二人展(呉・マチス画廊)。翌55年呉市美術公募展第11回展で呉市長賞。56年呉美術協会会員。57年水彩連盟会友に推挙,60年準会員,61年会員。62年藤川九郎,生田正雄,田辺伝と《水彩4人展》(広島八丁堀・福屋)。63年水彩

連盟展審査員。同年台北での日華水彩画交流展出品。64年呉美術協会役員(庶務)。81年4月呉市教育長(89年3月まで)。85年広島県教育賞。88年文部大臣表彰。89年呉市芸術文化功労賞。同年呉市立美術館での《くれみずえ「九人のあゆみ」展》に出品。90年呉美術協会副会長(現在に至る)。95年勳五等瑞宝章。98年呉市宮原公民館の緞帳原画制作。07年第45回鎮海軍港祭《鎮海市・呉美術協会交流展》に選抜出品。呉美術協会副会長。呉市宮原在住。

臧新明

ぞう しんめい ZANG XIN MING

1964年9月24日、中華人民共和国山西省に生まれる。87年山西大学美術学部卒。雅号は子夜。同年山西省で《新明画展》(個展)開催。88年東京新宿・住友ビルで《晋陽三人展》。91年北京・中央美術学院美術館で画展。同年北京・当代美術館で《新明画展》。92年《新明画集》出版(山西人民出版社)刊行。中央美術学院での研修生活を終える。93年カナダ・メープル国際画展出品の《都市・速度の声》で優秀賞。この年来日。95年中国美術家協会主催《「中国・日本」画展》(北京・中国美術館)に出品。96年アサヒビール文化財団主催《全国留学生美術作品展》で奨励賞。この年多摩美術大学大学院研究生を修了。小山敬三文化財団主催《アジア留学生秀作展》に出品。97年《新明J・I画展》(目黒区美術館)開催。《新明J・II画展》(練馬区立美術館)開催。98年横浜・三溪園日本画展に入選。多摩美術大学大学院修了、修士学位を取得。中国政府教育部の要請により、多摩美大・市川教授とともに北京で日本文化と日本画について講義。《98 現代水墨への挑戦展》(東海テレビ)で奨励賞。《新明J・III画展》(東京日本橋・同和火災ギャラリー)開催。この年、国際交流員として広島県川尻町の野呂山芸術村に入村。00年《新明J・IV画展》(呉市立美術館)を開催。《子夜―異国からの再思考・臧新明画集》刊行。01年中国山東師範大学客員教授。03年《臧新明画展》(ニューヨーク第一銀行芸術文化財団主催)。同年「子夜芸術研究会」を創立、篆刻に興味をもつ呉市民を指導を始める。04年3月野呂山芸術村を退村。同年呉市・川尻町合併記念《野呂山芸術村の作家たち》展(4.10-5.5 呉市立美術館)に6点出品。05年。中国教育部の重大研究項目「当代中・西藝術教育の比較研究」を担当。現在、中国山東師範大学美術学院客員教授。日本美学会会員。日本呉市子夜芸術研究会顧問。目下、広島大学社会科学部で博士課程履修中。呉市川尻町在住。

竹崎 ▲夫

たけざき たかお

1932(昭和7年)4月1日、呉市に生まれる。65年第24回水彩連盟展に入選。77年同第36回展で奨励賞(ヌーベル賞)。78年第33回呉市美術公募展で呉市教育会賞。翌79年呉美術協会会員。96年呉信用金庫本店で水彩仏像画展を開催(以後、10年間連続開催)。06年呉美術協会理事。96年以降、呉市内の公民館等で水彩画、児童画の講師を務めている。99年からは呉市立美術館絵画入門教室講師を3年間にわたって務めた。現在、水彩画同好会(竹彩会)を主宰する。呉市東畑町在住。
(注意)▲は「ハシゴ」の「高」。

田辺 伝

たなべ 伝

1924(大正13年)1月10日、呉市広町に生まれる。44年呉市立学校教諭のかたわら創作活動(水彩画)。52年水彩連盟展初入選、以後連続入選。53年第5回広島県美展に初入選、以後2回入選。同年第9回呉市美術公募展で呉市教育委員会賞。翌54年同展で呉市長賞。第13回水彩連盟展で資生堂賞。同年呉市・マチス画廊で

清田内匠との《水彩2人展》。55年水彩連盟展会友推挙(58年準会員、60年会員)。56年呉美術協会会員となり、以後十数回にわたり呉市美展で審査員を務める。60年大呉百貨店で岩崎守、沖本富正との《水彩3人展》。62年藤川九郎、生田正雄、清田内匠と《水彩4人展》(広島八丁堀・福屋)。63年広島県教育委員会事務局指導主事(美術科)に転じる。同年台北での日華水彩画交流展に出品。68年広島県教委管理主事。72年呉・ぷらざ画廊での《美術合同展》に出品。73年県教委から呉市立小学校長に転じる。75年水彩連盟呉支部長。以後、海外スケッチ取材旅行に出かけること十数回。訪問国は世界35ヶ国に及ぶ。84年呉市立長迫小学校長を最後に40年にわたる教員生活から退く。現在、水彩連盟会員、呉美術協会理事、呉市立美術館美術入門教室講師などを務める。呉市広文化町在住。

千田 禪

ちだ しずか

1952(昭和27年)6月18日、広島市に生まれる。84年第39回呉市美術公募展で呉美術協会賞。86年同展第41回展で呉美術協会賞。同年呉美術協会会員。92年第24回新協美術会展で佳作賞。同年第3回ひろしま美術大賞展で佳作賞。93年新協美術会会友。94年第26回新協美術会展で新協賞。同年女流画家協会展に入選。96年同展で沙織賞。01年第7回公募・広島美術入選。03年新協美術会を退会。この年、年呉市内で2回の個展開催。04年烏帽子☆絵星の会創立。翌05年烏帽子☆絵星の会第1回展―千田現代美術館?!―を自宅で開催。同年芸術家等の横断組織・広島芸術学会に入会。同学会が隔年開催する「芸術と思考」展に出品。06年第59回広島県美展入選。07年腰本悦二主宰のYOU悠の会に入会。さまざまなモチーフを平面に構成、ときにカラーージュなどの技法を用いながら抽象表現を試みる。呉市弥生町在住。

中本 侑孝

なかもと ゆきのり

1934(昭和9年)2月26日、呉市東惣付町に生まれる。公立学校教員のかたわら創作活動。53年第5回広島県美展に初出品、初入選。62年第17回呉市美術公募展で呉市議会議長賞。呉美術協会会員となる。70年自由美術展に初出品、初入選(78年まで出品)。71年呉銀嶺ギャラリーで松谷芋との二人展。72年呉羽田ビルで、80年呉相互銀行ロビーでそれぞれ個展。82年一水会展に出品(86年まで出品)。85年第37回広島県美展で奨励賞。97年から新構造展に出品、99年新構造社会員に推挙。00年新構造展で三村賞。01年呉市芸術文化功労賞。呉市立美術館絵画入門教室講師、呉美術協会理事などを務めた。呉市畝原町に住んだ。2004年(平成16)年12月9日没、70歳。

永山 優子

ながやま ゆうこ

1975(昭和50年)8月5日、愛媛県大洲市に生まれる。94年広島県立海田高等学校在学中、第44回広島県美展に入選。98年広島市立大学芸術学部美術学科油絵専攻卒。99年富田賞受賞候補作家展(東京・高島屋)に出品。00年広島市立大学芸術学部大学院芸術学研究科絵画専攻(油絵)修了。修了制作「斜影」がプリ・ラ・ジュネス賞。HOPES 2000 卒業修了作品選抜展(ふくやま美術館)。4月広島県立祇園北高等学校講師(～01年3月)。洋画有望作家展(天満屋広島店、天満屋福山店)。01年RUBICON・2001 広島市立大学油絵専攻修了生展(天満屋広島店、東京・東邦アート02年、03年、04年も出品)。同年視展・尾道展(尾道・孔雀荘)。03年広島市立大学芸術学部大学院後期博士課程博士号取得。4月呉宮原高等学校美術講師(～04年3月)。7月川尻町・野呂山芸術

村に入村。04 年視展・広島展（ギャラリーてんぐスクエア）。04 年呉市・川尻町合併記念《野呂山芸術村の作家たち》展に出品。04 年個展（10.13-19 大阪梅田・阪急百貨店）。06 年3月野呂山芸術村を退村。北海道伊達市在住。

朴 香淑

パク ヒャンスク PARK HYANGSOOK

1968 年4月 17 日、大韓民国ソウル市に生まれる。93 年多摩美術大学美術学部絵画学科（油画専攻）に入学、97 年同校卒。98 年《若き画家たちのメッセージ '98》展ですどう美術館賞。99 年多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了。同年第 54 回行動美術展で奨励賞。02 年多摩美術大学大学院博士後期課程美術研究科入学、05 年同課程修了、芸術博士号取得。同年韓国・世宗文化会館での日韓現代美術特別展に出品。06 年4月野呂山芸術村に入村。その他、各地での個展開催は多次にわたる。呉市川尻町在住。

橋本 美知子

はしもと みちこ

1923(大正 12)年9月 29 日、呉市和庄通に生まれる。寺内萬治郎に師事、光風会展に出品。61 年渡米、69 年帰国。この間、米アート・スチューデントリーグ・オブ N.Y.に留学。モーリス・カンターに師事。63 年アート・リーグ展で受賞。同年個展(N.Y.日本画廊)。64 年アート・リーグ展で受賞。65 年個展(ペンシルベニア・フォンタナ画廊)。66 年アート・リーグ展で受賞。同年個展(N.Y.ローコ画廊)。67 年アート・リーグ展で受賞。同年第 10 回安井賞候補新人展に出品(東京国立近代美術館)。同年個展(N.Y.コンテンポラリー画廊)。68 年リゴア・ダンカン展に出品(パリ)。69 年シイクス・ヤング・ジャパニーズ・アーチスト展に出品(N.Y.)。同年出身地・呉での初めての個展となる橋本美知子帰朝報告展(11.22-24 呉相互銀行)。70 年紀伊国屋画廊企画展に出品。71 年第 1 回橋本美知子油絵展(広島八丁堀・福屋)。以後、広島ではたびたび開催。東京、大阪でもたびたび個展。72 年ジャパニーズ・アーチスト展に出品(N.Y.)。東京都世田谷区桜上水在住。

浜岡 源三

はまおか げんぞう

1935(昭和 10)年 11 月 1 日、呉市に生まれる。73 年自由美術展に初めて出品。同年第 28 回呉市美術公募展で呉美術協会賞。76 年自由美術展で佳作賞。78 年呉銀座デパートで初めての個展。79 年自由美術協会会員に推挙。80 年東京日本橋・日本画廊で自由美術協会会員 4 人展。84 年呉ステーション画廊で「ミニ」作品による個展。85 年呉市立美術館を会場に《浜岡源三個展》。86 年東京展に 60 号から 240 号の作品 6 点を出品。91 年呉市立美術館を会場に《吉野誠・浜岡源三二人展》。93 年呉そごう画廊で個展。94 年自由美術協会平和賞。95 年浜岡源三ミニ展。呉市本通 6 丁目に住んだ。1997(平成 9)年4月 7 日死去。61 歳。

浜本 一絵

はまもと いちえ

1946(昭和 21)年8月 22 日、呉市阿賀町に生まれる。本名・西岡一枝。学習院大学卒。77 年イタリア・フィレンツェで金箔押しを学ぶ。79 年第 31 回広島県美展に初入選(以後 85 年第 37 回展, 93 年第 45 回展, 95 年第 47 回展で奨励賞)。82 年日本現代工芸美術展に初入選(93 年現代工芸賞)。同年同展中国会展に出品し始める(82 年・83 年工芸賞, 85 年広島市長賞, 89 年広島市教育長賞ほか)。83 年海外工芸作家との交流のためフランス、スペインを訪問。85 年広島県工芸作家協会展に出品し始める。同年ソ連、北欧、スコットランド等へ研修旅行。87~04 年ド・オーロ展に出品(東京朝日ギヤ

ラリー)。90 年第 1 回公募・広島美術に出品、入選。同年東広島市立美術館主催《女性の美術・広島の場合》展に招待出品。呉そごう画廊で個展。91 年 NHK 全国ネット番組《工房探訪・つくる》に出演。92 年フランクフルト工芸美術館での《伝統と前衛—日本の新しい美術工芸》展に出品。93 年日展に出品し始める(94 年, 96~02 年, 04 年, 05 年)。94 年広島アジア大会芸術展示に出品。96 年東京日本橋・日本画廊で個展。98 年東広島市立美術館主催《女性の美術・広島の同時代表現》展に招待出品。99 年広島県立美術館県民ギャラリーで《一絵 and クラフト 3 皮革造形展》。00 年広島八丁堀・福屋画廊で 3 人展。《国民文化祭ひろしま 2000》で佳作。広島袋町・袋町芸術館で個展。01 年高田郡八千代町(当時)八千代の丘美術館の第 1 期(平成 13 年度)入館作家となる。02 年東広島市立美術館主催《広島の今・女性作家の鼓動》展に招待出品。呉市政百年記念《海をみつめて美術展》に出品。05 年東京青山・ギャルリー・ワッツで個展。現在、日展会友、日本現代工芸美術家協会本会員、広島日展会会員、広島県工芸作家協会理事など。呉市阿賀中央在住。

原 開

はら ひらく

1925(大正 14)年1月 2 日、大阪市生まれ、生後まもなく呉市に移住。40 年呉海軍工廠見習教育養成所修了。45 年工作兵として台湾高雄で終戦を迎え 2 年間収容される。49 ごろ、呉の若手芸術家らで構成する「ヤネウラ美術同人」に参加(56 年青年美術家グループに改称)。このころ、広島アバンギャルド(のち広島平和美術展の母体となる)に参加。56 年第 20 回自由美術展に出品、初入選。以後、日本美術会主催日本アンデパンダン展に出品するようになるまで自由美術展に出品。63 年呉勤労者美術協会を結成、参加。広島県美術会議展に出品。66 年日本アンデパンダン展に初めて出品。67 年日本美術会会員となる。75 年柿手春三らが主導する海田湾埋め立て反対運動に呼応し、柿手春三、四国五郎、下村仁一とともに《海田湾スケッチ 4 人展》に出品。79 年にも前記 3 名のほか天道正人を加えた《海田湾スケッチ 5 人展》に出品するなど、主として呉、広島地域を中心に活動。呉市押込に住んだ。2002(平成 14)年3月 1 日死去。77 歳。

檜垣 敏子

ひがき としこ

1935(昭和 10)年 11 月 10 日、広島市舟入本町に生まれる。旧姓・紙田。56 年女子美術大学短大部卒。広島県美術展では、60 年第 17 回展に初出品で呉市長賞を受賞。以後、68 年第 20 回展で広島青年会議所賞、84 年第 36 回展で奨励賞を受賞。85 年同展無鑑査となり、91 年第 43 回展の審査員を務めた。広島平和美術展には 65 年から出品し始め、一時中断するも現在まで出品。二科展には 67 年から出品しはじめ、現在まで連続出品。75 年の二科広島展で広島市長賞を受賞したのははじめ、78, 84 年広島県知事賞, 94 年広島二科賞, 98 年中国新聞社賞, 03 年広島二科賞を受賞した。二科本展では 01 年に特選を受賞。個展は、94, 03 年三原・ギャラリー K で開いている。そのほか、韓国との国際交流展、広島芸術学会主催《制作と思考》展などにも出品している。三原市宮沖町在住。

東 才訓

ひがし まさのり

1970(昭和 45)年7月 24 日、呉市に生まれる。本名は曾田才訓。88 年呉三津田高校3年在学中の第 40 回広島県美展に初入選(以後、94 年まで連続入選)。93 年広島大学学校教育学部卒。公立学校教員を務めながら創作活動。90 年大学2年在学中、日洋展に初入選、以後連続入選。91 年大学3年在学中の改組第 23 回日展で初入選(以後、92, 93, 95, 96, 98, 02, 04~06 年入選)。94 年第 8

回日洋展で奨励賞。第 46 回広島県美展で奨励賞。第 4 回ひろしま美術大賞展で佳作。95 年日洋会会員に推挙。97 年第 11 回日洋展広島展で中国新聞社賞。98 年第 12 回日洋展で会員賞(03, 04 年会員賞)。呉市美術公募展に初出品, 呉美術協会賞。呉美術協会会員に推挙。00 年日洋会 100 人展に出品。05 年日洋会委員に推挙。堅実重厚な風景画。現在, 日洋会会員(96~), 日洋会委員(06~), 広島日展会会員(93~), 呉美術協会会員(99~)。広島市南区在住。

平田 春潮

ひらた しゅんちゆう

1930(昭和5)年 10 月 7 日, 呉市広大広に生まれる。本名は平田博美(ひろみ)。47 年船田玉樹に師事。49 年第 1 回広島県美展で広島県教育委員会賞。同年第 4 回呉市美術公募展で呉市文化団体連合会賞。50 年第 2 回広島県美展で中国新聞社賞。同年第 5 回呉市美術公募展で呉美術協会賞。51 年広島県美術家協会展で谷口賞。53 年広島県美展依頼出品者(無鑑査)となる。57 年第 42 回再興院展出品の「藤花」で初入選(以後, 59 年第 44 回展「秋景色」, 60 年第 45 回展「秋季」, 61 年第 46 回展「杉」, 62 年第 47 回展「庭園」, 63 年第 48 回展「石仏」で入選を果たす)。この間, 60 年日本美術院院友に推挙されたが, 64 年日本美術院を辞し, 新興美術院に移り, 第 14 回新興展で第三院賞。同院準会員に推挙。65 年新興美術院会員に推挙された。69 年第 19 回新興展で会員努力賞。76 年には新興美術院理事に推挙。83 年第 33 回新興展で文部大臣奨励賞。88 年呉市芸術文化功労者表彰。90 年新興美術院常任理事。94 年第 44 回新興展で内閣総理大臣賞。00 年社団法人新興美術院理事長(〜現在)。現在, 上記役職のほか呉美術協会理事, 呉市広文化団体連合会副会長。ほかに各種日本画講座の講師を務める。呉市広古新開在住。

フィン, マシュー

ふいん, ましゅー Matthew Phinn

1977 年 12 月 21 日, 英国ヨークシャーに生まれる。89 年普通, 16 歳で受験する General Certificate of Secondary Education (G.C.S.E) = 一般中等教育終了試験を 11 歳で受験, 美術の修了証を取得。94 年英国 Arkwright Technology Scholarship = アークライトテクノロジー奨学賞 Art & Design を受賞。97 年リーズ大学芸術学部入学。同大在学中に児童書「Classroom Creatures」(Roselea Publication 出版)の挿絵を描く。98 年英国リーズの Oakwood Gallery に作品展示。ITV 放送局のテレビ番組「Watercolour Challenge」(水彩画で風景画を描き競うコンペティション形式の番組)に出演, 優勝。99 年米国カリフォルニア州立大学に 1 年間留学, Dean's List of Achievement = 学業成績優秀者名簿に選定される。児童書「An Inspector Calls」(Roselea Publication 出版)の挿絵を描く。01 年 AIRSPACE = リーズ大学卒業記念展に出品。同年リーズ大学を卒業, 同大学芸術賞 Alan Mohun Memorial Prize = アラン・モハン記念賞を受賞。同年 7 月から埼玉県立戸田高校の英語講師(JET プログラム ALT)となる(〜翌年 7 月)。03 年東京・お台場でのデザインフェスタ 2003 に出品。山口県秋芳町によるアーティスト・イン・レジデンス事業, 秋吉台国際芸術村での英日 JOINT EXHIBITION に参加。04 年 4 月野呂山芸術村に入村(〜現在)。東広島市立美術館での World Arts : Hiroshima 2004 に出品。野呂山レストハウスでの野呂山芸術村新入村作家 4 人展に出品。05 年広島市のギャラリー・レイノで個展。呉市立美術館主催野呂山芸術村作家 4 人展に出品。宮島・ギャラリー宮郷で個展。06 年呉市川尻町・真福寺での第 13 回真福寺美術鑑賞会に出品。広島・ギャラリーてんぐスクエアで個展。広島福屋での第 94 回日本水彩展広島展で広島国際文化財団賞。アイルランド・スワンハウスでのゴルウェイ・アート

フェスティバル・グループ展に出品。07 年呉そごう美術画廊で大路誠, マシュー・フィン 2 人展。呉市川尻町在住。

福原 匠一

ふくはら しょういち

1945(昭和 20)年 4 月 15 日, 呉市川尻町に生まれる。本名福原勝一(しょういち)。65 年頃から日本画を志し広島県美展, 呉市美術公募展などに出品。70 年第 25 回呉市美術公募展で呉市議会議長賞。呉美術協会会員に推挙。71 年新協美術展に初出品, 入選。72 年新協美術会会友に推挙。同年広島八丁堀・福屋で第 1 回個展(以後 82 年まで毎年開催)。74 年新協美術展で受賞, 会員推挙。同年第 26 回広島県美展で呉市長賞。同年第 29 回呉市美術公募展審査員となる(以後たびたび務める)。75 年広島県美展依頼出品者(無鑑査)となる。呉美術協会日本画部理事となる(〜現在)。77 年新協美術会委員。79 年第 31 回広島県美展審査員となる(以後 84, 87, 91, 94 年審査員)。80 年川崎春彦に師事。81 年日春展に初出品, 初入選(以後, 毎年出品)。広島文化賞。自身の画塾・いおり会第 1 回展を呉中通三丁目・おりえんたる画廊で開催(以後毎年開催)。83 年改組第 15 回日展に出品, 入選(以後, 84, 86~90, 92, 93, 95~99, 01~06 年入選)。90 年広島三越での第 1 回個展(以後, 03 年まで隔年開催)。91 年ヒロシマ・アート・グラント'91 受賞, 広島八丁堀福屋で受賞記念展。93 年豊田郡川尻町文化ホール緞帳原画制作。95 年広島県美展改革小委員会委員となる。05 年広島三越で画業 40 周年記念《福原匠一日本画展》を開催。同時に《福原匠一画集》刊行。現在, 日展会友, 広島日展会会員, 日本美術家連盟会員, 広島県日本画協会副会長, 呉美術協会理事(日本画部)など。呉市川尻町在住。

星加 哲男

ほしか てつお

1951(昭和 26)年 8 月 12 日, 呉市に生まれる。81 年第 24 回新協展で新人賞。84 年千葉県立美術館主催・第 1 回浅井忠記念賞展入選(90, 92 年入選)。同年第 2 回上野の森絵画大賞展入選(85, 91, 92 年入選)。北九州ビエンナーレ入選(86 年入選)。名古屋日動画廊での伊藤廉記念賞展入選。第 27 回新協展で横山賞。86 年第 7 回現代日本絵画展入選。第 38 回広島県美展で奨励賞(88 年第 40 回展奨励賞, 89 年第 41 回展大賞)。90 年広島県美展無鑑査となる。同年中国新聞社主催・第 2 回ひろしま美術大賞展で佳作賞(92, 94 年佳作賞, 96 年優秀賞)。91 年公募・広島の美術入選(93, 95, 99 年入選, 97 年佳作賞)。93 年中国新聞社主催《広島の画家 100 人》展に招待出品。95 年第 47 回広島県美展審査員。96 年小磯良平大賞展入選(96, 00 年入選)。同年伊豆美術祭入選(96, 97, 00 年入選, 98, 00 年佳作賞, 04 年大賞)。97 年第 40 回新協展で安田火災記念賞。同年しんわ美術展で銅賞(98, 00 年グランプリ)。青木繁記念大賞展入選(98 年奨励賞, 99, 00, 05 年入選)。99 年中国新聞社主催・広島の 70 人展に招待出品。00 年安田火災美術財団奨励賞展出品。同年朝日チューリップ展秀作賞・審査員賞。03 年呉美術協会の一員として韓国鎮海市美術交流公式訪問に参加。05 年第 48 回新協展で東京都知事賞。現在, 新協美術会委員, 日本美術家連盟会員。呉市伏原在住。

松谷 芋

まつたに しげる

1931(昭和 6)年 7 月 23 日, 呉市本通に生まれる。「芋」が本名。「繁」「滋」「シゲル」と表記したこともある。50 年原田繁, 安久一郎らとヤネウラ美術同人結成に参加(55 年頃まで活動, 56 年青年美術家グループに発展改称)。52 年このころから呉市美術公募展に出品し始め

る。56 年第 12 回呉市美術公募展で呉市議会議長賞。翌 57 年同 13 回展で呉美術協会賞。呉美術協会会員となる。61 年第 25 回自由美術展初入選。67 年同展第 31 回展以降、退会まで毎回出品。72 年黄人展に参加。74 年第 38 回自由美術展出品の「戦慄」で佳作作家賞（その後 2 回受賞）。92 年呉美術協会役員（庶務）に就任。94 年第 66 回新構造展に出品、会友に推挙。同年呉市芸術文化功労賞。96 年新構造会員に推挙。97 年第 69 回構造展出品の「覗く」で会員努力賞。この年、日本美術家連盟会員となる。98 年呉市立美術館で安久一郎、笹賀捨雄との《画業 50 周年回顧三人展》を開催。99 年第 71 回新構造展出品の「疾走」で三村賞。現在、新構造社会員、日本美術家連盟会員、呉美術協合理事。呉市西片山町在住。

松本 壽人

まつもと ひさと

1923(大正 12)年 1 月 30 日、呉市宮原二丁目に生まれる。41 年京都市立絵画専門学校に入学、昼間同校に通うかわら、夜は独立美術協会京都研究所で須田國太郎の指導を受ける。43 年第 1 次学徒出陣により海軍・大竹海兵団に入隊。44 年戦時のため、京都絵専は繰り上げ卒業。45 年終戦とともに第二国分航空基地で残務整理を終え帰呉。46 年英連邦軍教育隊本部(呉)に特殊技能者として、梶田英一(のち光風会会員)とともに勤務。22 年第 1 回呉市美術公募展で呉市長賞。49 年 7 月呉港高等学校で美術指導(～54 年 6 月)。54 年 7 月呉市立阿賀中学校など 5 校で美術指導(～83 年 3 月)。88 年呉市美術同好会「15 人会」(会長・真鍋欽良)を指導(～現在)。呉市上平原町在住。

三上 博行

みかみ ひろゆき

1922(大正 11)年 1 月 6 日、三次市に生まれる。74 年陶芸家・黒川清雪に師事。76 年呉陶芸会(82 年解散)に入会、呉市文化団体連合会の事業に出品し始める。79 年第 34 回呉市美術公募展で呉市議会議長賞。翌 80 年第 35 回展で呉市長賞。呉美術協会会員となる。81 年第 33 回広島県美展に初入選(以後、第 35、38、42、46、47 回展で入選)。84 年呉美術協合理事となる。同年第 39 回呉市美術公募展審査員。94 年呉美術協会工芸部副部長、16 年同部長。呉市長谷町在住。

宮地 準三

みやち じゅんぞう

1933(昭和 8)年 2 月 20 日、呉市に生まれる。67 年呉市体育館サブコートで初めての個展(以後、毎年開催)。72 年第 15 回新協美術展に初出品、努力賞。73 年同第 16 回展で佳作賞。75 年新協美術会委員に推挙。83 年地元の古窯・野呂山焼の復元を試みる。85 年第 28 回新協美術展で工芸委員賞。87 年陶光会全国陶芸展で優秀賞、会員に推挙。東京銀座・陶悦で水滴展(以後 15 回開催)。89 年京都・ギャラリー墨雅堂で水滴展(以後 13 回開催)。90 年秋篠宮妃の輿入れ道具に自作の水滴が加えられる。京都高島屋での文房四宝名工展に招待出品。93 年第 23 回陶光会全国陶芸展で理事に推挙される。95 年第 25 回陶光会全国陶芸展で理事優秀賞。96 年中国・景德鎮市で開催の日中友好陶芸展で景德鎮市長賞。03 年陶光会全国陶芸展で東京都知事賞。06 年呉市一華寺座禅堂で 45 回目の個展。第 36 回陶光会全国陶芸展で文部科学大臣賞。呉市芸術文化功労賞。呉文化協会会員。呉市神山在住。

三好 忠義

みよし ただよし

1915(大正 4)年 8 月 17 日、呉市西辰川町に生まれる。35 年広島師範学校卒(44 年同校研究科修了)、同年男子国民学校を皮切りに、岩方、五番町、片山など、呉市立各小学校に勤務、教職のかたわら創作活動。48 年第 3 回呉市美術公募展で受賞。53 年同展で中国新聞社賞。54 年同展で呉市教育委員会賞。55 年から水彩連盟展に出品しはじめる。56 年第 8 回広島県美展で呉市議会議長賞。62 年第 21 回水彩連盟展で船岡賞。65 年同連盟準会員に推挙。66 年呉市立上山田小学校校長となる。68 年水彩連盟会員に推挙。74 年呉市小学校長会長。76 年呉市立昭和中央小学校長を最後に退職。85 年呉市芸術文化功労賞。89 年水彩連盟呉在住九人の会主催《くれみずえ九人の歩み》展を開催、出品(呉市立美術館)。96 年呉銀座デパートで三好忠義水彩画展開催。水彩連盟会員、呉美術協会会員、同理事。呉市内神町に住んだ。1999(平成 11)年 5 月 14 日死去。83 歳。勲五等双光旭日章を授与される。

安森 征治

やすもり せいじ

1941(昭和 16)年 4 月 30 日、竹原市下野町に生まれる。65 年広島大学教育学部美術科卒。林林男(はやし・しげお)に師事。同年第 31 回東光展で奨励賞、会友に推挙。73 年改組第 5 回日展に初入選(以後、25 回入選)。74 年第 26 回広島県美展で広島県知事賞(第 29 回展で大賞、第 31 回展で奨励賞)。東光会会員に推挙。73 年福山で初の個展(75 年福山、80 年竹原、84 年広島、86 年福山、92・96 年竹原)。80 年広島県美展無鑑査。89 年第 55 回東光会展審査員。96 年画文集《ぶらりたけはらー春から夏へー》を刊行。96 年インド東北部へ旅行。99 年改組第 32 回日展に出品の「一隅」で特選。01 年たけはら美術館の主催で《竹原ゆかりの作家・安森征治》展開催。02 年中国新聞社主催《広島県の画家 110 人》展に招待出品。04 年 2 度にわたりインド西部及び北西部に取材旅行。06 年スケッチ集《インド・風と人》刊行。たけはら美術館主催《土の華・今井政之／インドの風・安森征治》展開催。現在、東光会会員、日展会友、たけはら美術館協議会委員、絵画グループ「森の会」主宰。竹原市下野町在住。

矢野 國夫

やの くにお

1949(昭和 24)年 8 月 16 日、安芸郡坂町に生まれる。80 年陶芸家・黒川清雪に師事。00 年倉橋町長谷(ながたに)に楓天五輪窯を開く。呉美術協合理事。呉市倉橋町長谷在住。

芳川 誠

よしかわ まこと

1959(昭和 34)年、山口県光市に生まれる。83 年個展(G.ウエストベス名古屋)。84 年グループ展 PARNOIA(G.ウエストベス名古屋)に出品。85 年グループ展 MOVEMENT-85(名古屋市博物館)に出品。個展(私的人間達～交響～)。グループ展(視触覚 85)(G.ウエストベス名古屋)に出品。86 年愛知県立芸術大学卒。88 年東京藝術大学大学院修了。伊藤廉賞展(名古屋・日動画廊)入選。89 年伊藤廉賞展記念賞。90 年第 66 回白日展で一般佳作賞。白日会準会員に推挙。91 年第 67 回白日展で富田賞。白日会会員に推挙。八月会展(東京・日動画廊)に出品。92 年光市ふるさと人材育成選奨。うつくしすぎる嘘ー現代リアリズム絵画展 PART Iー(日本橋三越)に出品。93 年三人展-志田誠信・高松秀和・芳川信-(東京日本橋・春風堂画廊)。伊藤廉賞展最終記念展(名古屋・日動画廊)に歴代受賞者として招待出品。第 2 回ウエンリー賞。同賞受賞記念展に出品。94 年第 9 回山口県周南地区選抜美術展「光市制 50 周年記念」に

出品。八月会展（東京・日動画廊）に出品。うつくしすぎる嘘ー現代リアリズム絵画展 PART II ー（日本橋三越）に出品。95 年八月会展（東京・日動画廊）に出品。96 年県内在住・出身作家展（パレット画廊山口）に出品。96 年6月野呂山芸術村に入村。97 年同村退村。00 年第4回ヴォワール展に出品（01年第5回展～05 年第9回展連続出品 東京日本橋・春風堂画廊）。06 年刻刻ー若手洋画家 19 人による小品展（東京日本橋・春風堂画廊）に出品。07 年 2007 両洋の眼展に出品。山口県光市在住。

吉平 泰明

よしひら やすあき

1922(大正 11)年3月2日、因島市に生まれる。49 年独立美術協会会員・宇根元警に師事。東洋工業(現マツダ)に勤務するかたわら創作活動。56 年第8回広島県美展, 57 年同9回展で因島市長賞を連続受賞。66 年から約1年間、パリに遊学。79 年第 31 回広島県美展審査員。80 年から約1年間2度目のパリ遊学。82 年吉平泰明小品展(10.21ー26 スズカワ画廊 以後, 83 年から 92 年まで毎年1回同画廊で開催。)。88 年第 40 回広島県美展審査員。91 年随筆集《コミシ・コムサー絵の周辺》を自費出版。92 年随筆集《続・コミシ・コムサー過ぎゆく日々》を自費出版。また、荒井不可志(広島銀行)、有田守成(国鉄)、灰谷正夫(中国新聞)らとともに職場美術協会の主要メンバーとしても活動した。独立美術協会会友。広島県美展依頼出品者(無鑑査)。住居ははじめ呉市吉浦町、のちに広島市安芸区船越に移り住んだ。1992(平成4)年9月 17 日死去。70 歳。

王 培

ワン ペイ WANG PEI

1976 年7月 20 日、中華人民共和国天津市に生まれる。98 年北京市中央工芸美術学院(現精華大学美術学院)装飾絵画専攻卒。美術研究のため来日。01 年広島市立大学大学院芸術研究科博士前期課程絵画専攻(日本画)入学。03 年修了。02 年日本画5人展(広島・ギャラリーてんぐスクエア)に出品。03 年広島市立大博士課程卒業修了制作展出品の模写日本画が日本画研究室買い上げとなる。前期課程につづき、後期課程に入学(07 年修了, 博士学位取得)。英国大英博物館東洋絵画修復室で調査研究。04 年第 59 回春の院展に初入選。再興第 89 回院展に初入選。現代日本の表現展に招待出品(富山・セレネ美術館)。04 年4月野呂山芸術村に入村。野呂山芸術村四人展(呉市・野呂山芸術村ギャラリー)に出品。05 年個展・王培日本画展(幼き心)(広島・ギャラリーてんぐスクエア)。第 60 回春の院展に入選。再興第 90 回院展に入選。野呂山芸術村交流展(野呂山芸術村ギャラリー)に出品。野呂山芸術村作家四人展(呉市立美術館)に出品。06 年第 61 回春の院展に入選。第 12 回松柏美術館花鳥画展(奈良・松柏美術館)に入選。再興第 91 回院展に入選。日本美術院院友推挙。07 年個展《花様年華》(東京銀座・ナカジマアート)開催。現在、野呂山芸術村芸術交流員。日本美術院院友。呉市川尻町西在住。

〔主要参考文献〕ー刊行順ー

- 広島県のやきもの展図録 1974 年 広島県立美術館
- 巨匠・中西利雄展図録 1978 年 広島県立美術館
- 広島県の地名(日本歴史地名体系 36) 1982 年 平凡社
- 独立美術協会 50 年 1982 年 弦田平八郎著 独立美術協会発行
- '84 美術ひろしまー'91 美術ひろしま 1984-91 財団法人広島市文化振興事業団
- 黒から白へ…生命をみつめるー岡崎勇次 1985 年 岡崎勇次展実行委員会
- 《手島呉東遺作展》パンフレット(1985 年)所載《宮尾敬三「手島呉東プロフィール」》
- 県美展 40 年のあゆみ展出品目録 1988 年 広島県立美術館
- くれみずえ九人の歩み 1989 年 水彩連盟会員呉在住九人の会
- 広島県立美術館所蔵作品の作家 1990 年 広島県立美術館
- 日展史資料 I 文展・帝展・新文展・日展 全出品目録 1990 年 社団法人日展
- 広島美術の系譜ー戦前の作品を中心にー展図録 1991 年 広島市現代美術館
- 光風会史ー80 回の歩みー 1994 年 社団法人光風会
- 池田快造画集 1994 年 同画集編集委員会編(発行:三原信用金庫)
- 没後 30 年 戸塚孝三郎展図録 1995 年 ふくやま美術館
- 竹原ゆかりの作家展ー木村露・手島守之輔・坊一雄・南薫造ー 1996 年 たけはら美術館
- 呉美術協会創立 50 周年記念誌 美術くれ 1996 年 呉美術協会
- 長田国夫作品集 1996 年 長田国夫作品集刊行委員会
- 南薫造展図録 1998 年 広島県立美術館
- 秦森康屯遺作展図録 1998 年 同展実行委員会編(発行:かもめ信用金庫)
- 野呂山芸術村図録 1999 年 川尻町芸術村実行委員会
- 竹原ゆかりの作家展ー安森征治ー図録 2001 年 たけはら美術館
- 形象ー形象派 50 周年記念ー 2002 年 形象派美術協会
- 中国新聞創刊 110 周年記念 広島の絵画 110 人展図録 2002 年 中国新聞社
- 1940-60 年代 広島洋画の粋ー時代を生き抜いた作品たちー展図録 2004 年 広島県立美術館
- ひろしま鉄道大集合ーふるさとの夢と郷愁を乗せてー展図録 2005 年 広島県立歴史博物館
- 第 65 回記念 水彩連盟展画集 2006 年 水彩連盟事務所
- 呉美術協会創立 60 周年記念誌 美術くれ 2006 年 呉美術協会
- 描写の可能性を視るー灰谷正夫・清水勇・小間野生徳ー 2007 年 三人展実行委員会